翻　　訳

和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）」（第16~18章）

外　薗　幸　一

まえがき

本稿は前号（鹿児島国際大学『国際文化学部論集』第20巻３号）に掲載した和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）」（第15章）」に引き続くものである。「第19巻１号」（本シリーズ冒頭の号）所載の和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）（第１～３章）」の「まえがき」に記載したように，筆者は，すでにラリタヴィスタラ全27章の初訳を一応完了しているのであるが，もう少し読み易い和訳にすることを目標に「改訂版」を作成することにした。そして，これまでに第１章から第15章までを発表したので，今回はそれに続く形で，第16章から第18章までを掲載する。なお，第15~21章は，拙著『ラリタヴィスタラの研究　中巻』の「第三部」に掲載したので，これらの章は『中巻』を底本とすることになる。

略号

方広　=『方廣大荘厳経』（大正新脩大蔵経 187）．Chinese Translation of the Lalitavistara.
普曜　=『普曜経』（大正新脩大蔵経 186）．A ChineseTranslation of the (old) Lalitavistara.
『佛教大辞典』 = 『望月 佛教大辭典（増訂版）』（昭和32年増訂版，世界聖典刊行協会）
『梵和大辞典』 = 荻原雲来編『漢訳対照　梵和大辞典』（昭和53年，講談社）
『佛教語大辞典』 = 中村元『佛教語大辞典』（昭和56年，東京書籍）
『上巻』 = 外薗幸一『ラリタヴィスタラの研究　上巻』（平成６年，大東出版社）
『中巻』 = 外薗幸一『ラリタヴィスタラの研究　中巻』（2019年，大東出版社）
BHSG = *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary* Vol. I : Grammar, by F. Edgerton, New Haven, 1953.
BHSD = Ditto, Vol. II : Dictionary.

括弧符号の使い分け

和訳の文章中において用いる括弧は，原則として，次のように区別する。

1.「　」は，会話文を示すために用いる。
2.（　）は，直前の言葉を，別の言葉で言い換えるために用いる。
3.［　］は，訳文を補充して，意味をはっきりさせるために用いる。
4.〈　〉は，特殊な複合語や，重要な熟語を示すために用いる。
5.《　》は，東大主要写本に原文が欠落しているが，挿入すべきである部分の訳文に用いる。
6.〔　〕は，東大主要写本に原文が挿入されているが，削除すべきである部分の訳文に用いる。
7.【　】は，諸写本に混乱があり，削除すべきか挿入すべきか確定しがたい部分の訳文に用いる。

＊なお，第 15 章から第 21 章までの訳文の左端に付してある数字（40~446）は，『中巻』第二部（本文校訂）における梵語原文のページ数を示すものである。

キーワード：ラリタヴィスタラ，仏伝文学，大乗仏教，混淆梵語，仏教思想

『ラリタヴィスタラ』（大遊戯経）

第16章（ビンビサーラ来詣品）[1]

158　かくの如く，実に比丘らよ，チャンダカは，菩薩の威神力[2]（加持）によって，シュドーダナ王と，釈女ゴーパー（釈尊妃）と，また，全ての中宮婇女衆と，さらにシャーキヤ（釈迦族）衆全員の悲しみを慰撫する言葉を語りたり。

かくして比丘らよ，菩薩は，猟師の扮装をなせる天子にカーシ産の美服を与え，彼より袈裟衣を受け取って，世間に随順せんがために，衆生を哀愍するが故に，また，衆生を教化せんがために，まさに自ら出家したり[3]。

さてまた，菩薩はヴァンシャキー婆羅門女[4]の隠棲処に赴けり。彼女は菩薩を休息せしめ，食物を捧げたり。

それから，菩薩はパドマー婆羅門女[5]の隠棲処に赴けり。彼女からもまた，菩薩は宿泊と食物との提供を受けたり。

それから，ライヴァタ梵仙[6]の隠棲処に赴けり。彼もまた，全く同様に，菩薩を歓待せり。同じく，ダマダンディカの息子ラージュヤカ[7]もまた，菩薩を歓待せり。

かくして，実に比丘らよ，菩薩は，次第に，大都城ヴァイシャーリー[8]に到達せり。而して，その時，アーラーダ・カーラーマ[9]は，声聞の大衆会と三百名の弟子[10]たちとともに，ヴァイシャーリー城に依止して[11]住したり。彼は弟子たちに無所有處[12]の戒行に相応する法を説けり。彼は，菩薩が遠方より来至せるを見て[13]，奇特の念[14]を生じ，弟子たちに呼びかけたり。「さても，見よ。彼の姿

---

[1] 方広には「頻婆沙羅王勸受俗利品」と訳されている。

[2] adhiṣṭhāna は「威神力」「加持力」等と漢訳される。「仏・菩薩の有する不可思議な力」であり，「その不可思議な力をもって衆生を護ること」をいう。

[3] 「自ら出家する」とは，釈尊の出家作法が他から具足戒を授けられるのではなく，無師にして自ら戒を具足する「自具足」によるものであったことを指すものと思われる。

[4] vaṃśakī という人名については不明である。方広には「鞞留梵志苦行女人」と訳されている。

[5] padmā という人名についても不明である。方広には「波頭摩梵志苦行女人」と訳されている。

[6] raivata という人名についても不明であるが，revata という人名との混同が疑われる（cf. BHSD,Raivata）。方広には「利婆陀梵行仙人」と訳されている。

[7] 方広には「光明調伏二仙人」と訳されており，rājyaka と damadaṇḍika とが別人と見られているようである。

[8] vaiśālī は「インド古代の商業都市」である。方広には「毘舎離城」と訳されている。

[9] レフマン本では ārāḍa kālāpa（アーラーダ・カーラーパ）と校訂しているが，ミトラ本の校訂の如く ārāḍa kālāma と読むのが適切と思われる。方広は単に「阿羅邏」と訳している。

[10] 「弟子」（śiṣya）は「師にしたがってその教えを受ける門人」であり，基本的に出家修行者であったと思われる。「声聞」（śrāvaka）も「師の教えを聞く者」という意味では「弟子」であるが，元来は「出家でも在家でも，教えを聞く人」の意味であり，在俗信者を含めていた。「後代になると，仏教では，教団を構成している出家修行僧のことのみをいうようになった（これに対してジャイナ教では後には śrāvaka というと在俗信者のことのみを意味するようになった）」（『佛教語大辞典』734頁参照）。

[11] 「依止する」とは「たよる，よりどころとする」の意であり，ここでは，出家者が生活の糧を得るために城の近くに住んでいたことを示すものと考えられる。方広は単に「城傍（城の傍に）」と訳している。

[12] 「無所有處」とは「いかなるものもそこに存在しない三昧の境地」（『佛教語大辞典』1329頁参照）である。方広には「無所有處定」と訳されている。

[13] 「遠方より来至せるを見て」とは「近づいてくる菩薩が，まだ遠くに見えるのに」というような意味であろうと思われる。

[14] 「奇特の念」とは「いまだかつて感じたことのないような不思議な想念」の意である。方広には「心生希有（心に希有を生じ）」と訳されている。

を見よ」と。彼ら（弟子たち）は答えたり。「われらも，同じく，それを観察せり。彼は甚だ驚歎すべき［人物］なり」［と］。

160　それから比丘らよ，われは[15]，アーラーダ・カーラーマのいるところに近づき，アーラーダ・カーラーマにかくの如く言えり。「いざ，われはアーラーダ・カーラーマのもとにて[16]，梵行[17]を修学すべし」［と］。彼は言えり。「さればゴータマよ。浄信ある族姓子[18]がそこにおいて［修行すれば］労苦少なくして遍知[19]を獲得するところの，かくの如き法の教説のもとにて修行せよ」［と］。

比丘らよ，われは自らかくの如く思念せり。「われに願楽[20]あり，精進あり，正念あり，三昧あり，智慧あり。さればいざ，その法を正しく獲得し，現証[21]せんがために，われは独りで，不放逸かつ熱心に，遠離の行[22]に住すべし」［と］。

そして，実に比丘らよ，われは独りで，不放逸かつ熱心に，遠離の行に住し，労苦少なくして，その法を正しく会得し，現証したり。

その時，比丘らよ，われはアーラーダ・カーラーマのもとに赴き，かくの如く言えり。「さて，アーラーダよ，御身はかくの如き類の法を会得し，現証したるや」［と］。彼は言えり。「実に，ゴータマよ。それ，その如くなり」［と］。われは彼に[23]言えり。「されば，われもまた，その法を現証し，会得したり」［と］。彼は言えり。「しからば，実に，ゴータマよ，われが知るところの法，それを御身もまた知り，御身が知るところのもの，それをわれもまた知る。それ故に，この弟子衆をも，われら両名が教導すべし[24]。」

かくして，実に比丘らよ，アーラーダ・カーラーマは最高の尊敬を以てわれを供養したり。また，近住弟子[25]たちの中でも，われを［師と］同等なる地位に置けり[26]。

比丘らよ，われは自ら，かくの如く思念せり。「この，アーラーダの法は，解脱に導くものにあらずして，それを行ずる者に[27]完全なる苦滅[28]を成就せしめるものにあらず。されば，われはこれよりも勝れたるものを尋求して，修行すべし。」

162　かくして比丘らよ，われは，心ゆくまでヴァイシャーリーに住したるのち，マガダ国に向かって遊歴し，マガダ国のラージャグリハなる都城[29]，そこに赴き，また，山の王なるパーンダヴァ[30]のふ

---

[15] 直前の場面までは，「菩薩は」という表現で主語を客観的に描写していたが，この場面では「われは」という表現で主観的に描写している。典拠になっている文献が異なっていたり，著者の意識が明確でなかったりして，このような混乱が発生するものと思われる。

[16] チベット訳は「いざ，アーラーダ・カーラーマよ，御身よりわれは」という意味の訳文になっている。

[17]「梵行」（brahma-carya）とは「さとりに至る実践行」であり，「婬欲を断ち，戒律を護持する清浄な修行」を意味する。

[18]「族姓子」とは「良家の子。立派な男子。善良な紳士」の意である。『佛教語大辞典』890頁参照。

[19]「遍知」とは「あまねく知り尽くすこと。さとりの智慧」の意である。『佛教語大辞典』1213頁参照。

[20]「願楽」とは「知ろうと欲すること。ねがいこのむ」の意である。『佛教語大辞典』200頁参照。

[21]「現証」とは「あきらかに見通すこと」である。

[22]「遠離の行」とは「世俗的なものから遠ざかり離れ，けがれとまじわらず，寂静のうちに過ごすこと」である。

[23] チベット訳には「彼に」（tam）に当たる訳語がない。

[24]「教導すべし」の原文は pariharāvaḥ である。方広には「教授」と訳されている。

[25]「近住弟子」（antevāsin）とは「阿闍梨（師）の下に住み，教授を受ける者」の意である。『佛教語大辞典』431頁参照。

[26] 方広には，この部分が「諸学徒中以我一人為其等侶」と訳されている。

[27]「それを行ずる者に」（tatkarasya）は，チベット訳には「それを行ずるとも」（de byed pa）と訳されている。

[28]『中巻』には「完全なる苦の消滅」と訳したが，「完全なる苦滅」と訂正する。「苦の完全なる消滅」の意である。

[29] rājagṛha は「王舎城」と漢訳される。「ラージャグリハなる都城」の部分は，チベット訳には「ラージャグリハの大都城」（rgyal poḥi khab kyi groṅ khyer chen po）と訳され，方広にも「王舎大城」と訳されている。

[30] pāṇḍava は「王舎城の五山の一」とされ，また，「佛，出家後七日にして，王舎城に来り，托鉢し終り，人人にこの市の

もとに達したり。その山王パーンダヴァの中腹に，われは独りで，同伴者なく，仲間なけれども，幾百千拘(コーティー)胝(ナユタ)那由多もの天神衆に守護せられて住したり。

それから，われは，晨朝時(しんちょうじ)[31]において，内衣を着け，鉢と上衣とを持って[32]，タポーダ（温泉）門[33]より，ラージャグリハの大都城に，托鉢すべく入りたり。前進するも後退するも，前方を見るも左右を眺めるも，身を屈するも伸ばすも優雅なりて，僧伽梨衣(そうぎゃりえ)（大衣）[34]と帛巾(はくきん)[35]と鉢と衣類を持すること端厳(たんごん)にして，感官は散乱することなく，心を外面に表さざること化人(けにん)[36]の如く，胡麻油の壷[37]を持てるが如く軛(くびき)の長さ（足下前方の地面）を見ながら［都城に入りたり］。その時，ラージャグリハ（王舎城）の人々は《われを[38]》見て，奇特の念を生じたり。「この方(かた)は，もしや梵天ならんや。天主帝釈ならんや。あるいは毘沙門天(びしゃもんてん)ならんや。あるいは，いずれか山の神なるものならんや」［と］。

そこで，かくの如く言われる。

1．その時，垢穢(くえ)あることなくして，威光無量なる
　菩薩は，今や[39]，自ら出家したまいて，
　心は寂静なりて，温順(おんじゅん)に，威儀具足(いぎぐそく)して，
　山王パーンダヴァの中腹に住したまえり。

2．菩薩は，夜の明けたるを知るや[40]，
　この上もなく身奇麗(みぎれい)に着衣して，
　鉢を持ち，謙虚なる心のままに，
　彼は，ラージャグリハに托鉢のために入りたり。

164　3．紫磨金色(しまこんじき)[41]の黄金の如く，よく清められ，
　また，三十二相［の大人相］の鎧(よろい)を着けたり。
　女人のみならず，男衆もまた［彼を］眺めながら，
　誰もが，［彼を］見ることに厭足(えんそく)を生じることなかりき。

4．宝の衣類と穀類とを以て飾られたる街路を，
　人々は掃除しながら，彼の後(うしろ)に従えり。

出家は何れに住するやを問ひ，pāṇḍava 山の東面との答を得，其處に到り給ふ」との註釈が見られる（赤沼智善編『印度佛教固有名詞辞典』480~481頁参照）。方広は，この場面で，この山の名を「霊鷲山」としている。

[31]「晨朝」とは「昼を三時に分けたうちの卯から巳の刻（午前6~10時）をいう。『佛教語大辞典』787頁参照。

[32]「内衣を着け，鉢と上衣とを持って」の部分は，チベット訳では「内衣と上衣とを身に着け，鉢を持って」という意味の訳文になっている。

[33]「温泉門」の原語は tapoda-dvāra であり，方広にも「温泉門」と訳されている。

[34]「僧伽梨」（saṃghāṭī）とは「大衣・重衣」ともいい，「比丘の三衣の中で最大のもの」であり，「説法や托鉢のために王宮や聚落に入る時には，必ず着ける」ものである。『佛教語大辞典』874頁参照。

[35]「帛巾」（paṭa）とは「織ったばかりの模様のない絹ぎれ」であり，「綴衣（まんえ）」と漢訳されることもある（『佛教語大辞典』1288頁参照）。

[36]「化人」（nirmita）とは「仏・菩薩が人の形に現われたもの。化作された人」の意である（『佛教語大辞典』1215頁「變化人」参照）。

[37] チベット訳は「胡麻油の満ちた壷」という意味の訳文になっている。

[38]「われを」（māṃ）は，東大主要写本に欠けており，チベット訳にもこれに当たる訳語はないから，元来なかったものと思われるが，文脈上は，これを挿入したほうが分かりやすい。

[39]「今や」の原文は iha である。チベット訳には，これに当たる訳語はない。

[40]「夜の明けたるを知るや」の部分は，方広には「於彼晨朝時」と訳されている。

[41]「紫磨金色」とは「紫色を帯びた金色」である。『佛教語大辞典』546頁参照。

「光明を以て都城全体を輝かしめる，
かつて見ざりし，この衆生は一体誰か」［と］。

5．幾千名もの女人が，屋上に，あるいはまた，
門上に，さらには，円窓にも立って，
彼女らは，家を空にして，道路にあふれ，
他の仕事は放置して，最勝人（菩薩）を眺めたり。

6．また，［人々は］売買も全然行うことなく，
酒飲み[42]も酒を全く飲まざりき。
最勝なる丈夫[43]の姿を観察せる時，
［人々は］家にても道路にても安坐することなかりき。

7．ある男が，急いで王宮に行き，
彼は嬉々として，ビンビサーラ[44]王に告げたり。
「王よ，御身に最高の利得が得られたり。
この都城にて，梵天が自ら托鉢を為せり」［と］。

8．ある者は「［かの者は］天主帝釈なるべし」と言えり。
他の者は「スヤーマ天子（夜摩天王）なるべし」と言えり。
166 同じくまた，他の者は「サントゥシタ（兜率天王）か，または，
ニルミタ（化楽天）か，それともスニルミタ[45]の天神なるべし」と言えり。

9．ある者たちはまた，「月天か日天なるべし[46]」と言えり。
はたまた，「ラーフか，バリか，ヴェーマチトリン[47]なるべし」と。
ある者たちはまた，かくの如き言葉を語れり。
「この方は，かの，山王パーンダヴァに住する者なり」［と］。

10．かの[48]王（ビンビサーラ）は，この言葉を聞くや，
心に最高の喜びを得て，窓辺に立ち，
よく精錬された黄金の如く，威光に輝ける，
最勝衆生たる菩薩を眺めたり。

11．ビンバサーラ[49]王は，［かの］男[50]に命じたり。
「［菩薩に］食物を与えしめ[51]，［その後］どこに行くかを見よ」と。

---

[42]「酒飲み」（soṇḍa = śauṇḍa）とは「酒を好んで多量に飲む人」の意である。

[43]「丈夫」（puruṣa）とは「立派な男子」の意である。

[44] この王名については，写本中において bimbisāra（ビンビサーラ）とされたり bimbasāra（ビンバサーラ）とされたりして，混乱が見られる。

[45] sunirmita は一般には「化楽天王」の名であるが，ここでは文脈上「他化自在天王」を指すものと思われる。方広にも「他化主」と訳されている。

[46]『中巻』には「月か太陽ならん」と訳したが，「月天か日天なるべし」に訂正する。

[47] rāhu, bali, vemacitrin はいずれも阿修羅王の名である。

[48] チベット訳には「かの」（asau）に当たる訳語がない。

[49] この王名を Vaidya の校訂本は bimbisāraḥ とし，Śāntibhikṣu śāstrī は bimba(?mbi)sāraḥ と校訂しているが，写本によれば bimbasāraḥ と読む以外にはない。bimbisāraḥ とする写本が見当たらないからである。

[50] この「男」（puruṣa）とは，第７偈に登場する「王に菩薩の到来を最初に告げた男」を指すものと思われる。チベット訳には「かの人に」（mi de la）と訳されている。

[51] この部分は，チベット訳には「食物を与えた後」（bsod sñoms byin la）と訳されているが，方広には「王因勅左右。奉

彼（菩薩）が最勝なる山（パーンダヴァ）に戻りたるを見て，
「王よ[52]，彼は山の中腹に居住せり」と告げたり。

12. 人民の王ビンビサーラは，夜の明けたるを知るや，
多くの家臣衆に囲繞せられて，
山王パーンダヴァのふもとに赴き，
その山が威光によって輝けるを見たり。

13. ［王は］車駕より降りて，歩行によって進み，
菩薩を，最高の敬意を以て眺めたり。
かの人中尊[53]（菩薩）は，あたかもメール山の如く，
動じるところなく，［地に］草を敷いて［その上に］坐したり。

168　14. 王は［菩薩の］足下に頭面をつけて礼拝し，
さまざまの言葉を発して，語りかけたり。
「汝に［わが］全領地のうちの半分を与えるべし[54]。
この世における感覚的享楽を享受されよ。托鉢することなかれ。」

15. 菩薩は美妙なる《言葉を[55]》発したり。
「大地の主よ，久しく寿命を守らせたまえ。
われは，好ましき王国を捨てて，しかも［それに］
愛著あることなく，［心の］寂滅を求めて出家したり。」

16. ［王は言えり］「汝は少壮にして，清新なる若さを有し，
身体の色つや美しく，勢威（元気）に満ちたり[56]。
広大なる財物と女人衆とを領受[57]して，
この，わが王国に住して，愛欲を享楽されよ。」

17. かの[58]マガダ王（ビンビサーラ）は［更に］菩薩に告げたり。
「われは汝を[59]見て，最高の喜びを得るなり。
わが全国民の同胞と成りたまえ。
われは汝に権勢を与えるべし。愛欲を享楽されよ。

18. もはや[60]空寂たる林中に住することなかれ。
今よりは，大地に横たわることなく草の上に休むことなかれ。
汝の身体は，この上もなく優美なり。
この，わが王国に住して，愛欲を享楽されよ」［と］。

献菩薩食」（王因つて左右に勅して，菩薩に食を奉献し）と訳されている。

[52]「王よ」（deva）に当たるチベット訳は「ある者が」（kha cig）となっており，梵文と合わない。

[53]「人中尊」とは「生きもののうちで最も尊い者」の意である。普通は「両足尊」という。『佛教語大辞典』1070頁参照。

[54] チベット訳は「与えるが故に」という意味の訳文になっている。

[55]「言葉を」（gira）は東大主要写本に欠けているが，第19偈に見られる同一の文を参考に挿入する。

[56] チベット訳は「満ちたるが故に」という意味の訳文になっている。

[57]「領受」とは「わがものとして執すること」である（『佛教語大辞典』1428頁参照）。

[58] チベット訳には「かの」（sa）に当たる訳語がない。

[59] チベット訳は「御身の身体を」という意味の訳文になっている。

[60] チベット訳には「もはや」（puna = punar）に当たる訳語がない。

19. 菩薩は［王に］，美妙なる，邪曲なくして愛すべき，
有益にして哀愍あふれる言葉を語りたり。
170 「大地の主よ，御身には常に吉祥あれ。
されど，われは感覚的享楽を願求することなし。
20. 愛欲は毒に似て，無限の罪過を有し，
［それに愛著する者を］地獄や餓鬼や畜生に堕さしめる。
また，愛欲は高貴ならずして，賢者には嫌悪せられる。
われもまた，汚れたる涕唾[61]の如く［それを］捨棄する。
21. 愛欲は，樹上の果実の如く，［遂には］落下し，
去り行くこと，あたかも雨雲か雷雲の如し。[62]
堅実ならずして，風の如く移ろい易く，
一切の浄善を散逸せしめ，誑惑[63]する。
22. 愛欲は，獲得せられざる間は，［求める人を］憔悴せしめ，
また，［たとえ］獲得されるとも，満足を生ぜしめることなし。
若し自在ならざる者がみだりに［それに］親近すれば[64]，
その時，愛欲は恐るべき多大の苦を生ぜしめる。
23. 大地の主（王）よ，天界の欲楽なるものと，
更にまた，人間の欲楽の勝妙なるものとの，
全ての欲楽とが，ある人に得られたとせよ，
その者は，なおいっそう尋求して，満足を得ることなからん。
24. されど，大地の主よ，心寂静にしてよく自制し，
高貴にして，煩悩なく，法の想念に満ち，
賢き智慧によって満足する者，彼らはよく満足する。
而して，感覚的享楽には如何なる満足もあることなし。
172 25. 大地の主よ，愛欲に専心しようとも，
かつて，有為法[65]（感覚的欲望）には辺際あることなし。
あたかも，人が海塩水を飲むに似て，
愛欲に専心すれば，いっそう渇きが増大する。
26. 大地の主よ，更にまた，身体を見られたし。
それは恒常ならず，堅牢ならざる，苦悩の器械にして[66]，
九孔[67]の門より常に［汚穢を］漏泄する。

---

[61]「涕唾」(kheṭapiṇḍa) は，チベット訳（ṅar snabs）によれば「鼻涕（はなじる）」を意味する。ここでは方広に従って「涕唾」と訳した。「涕唾」とは「泣いて出る鼻水や唾液」の意である。

[62] この一行のチベット訳は「あたかも雲や雨の如く去り行く」という意味の訳文になっている。

[63]「誑惑」とは「たぶらかすこと，偽り惑わすこと」である。

[64]「親近する」とは「愛好を示す，好意をもって近づく」の意である。

[65]「有為法」とは「因縁によって生滅する現象界の一切の事物」を指すが，ここでは「身心の活動から生じる感覚的欲望」を意味するものと考えられる。

[66]「苦悩の器械にして」の部分は，方広には「衆苦作機関」と訳されている。

[67]「九孔」とは「肉体の九つの門」であり，「両眼，両耳，両鼻，口，大小便の九処」をいう（『佛教語大辞典』253頁参照）。

王よ，われは欲楽に愛著することなし。

27. われは多大なる欲楽をも，あるいはまた，
幾千もの見目麗しき女人衆をも捨て，
最高に安穏なる無上菩提を得んと欲して，
われは世俗の生存を楽しむことなく，出家したり」[と]。

【王は言えり[68]】

28.「比丘よ，汝は，どの地方の，どこより来たれりや。
汝の生まれはどこか。汝の父はいずこに。母はいずこに。
[汝は] クシャトリヤか，バラモンか，それとも王侯か。
比丘よ，もし負担に思わざれば，語りたまえ。」

【菩薩は言えり[69]】

29.「大地の主よ，シャーキヤ（釈迦）族のカピラ城は，
最も豊饒にして富裕なりと知られたり。
わが父はシュドーダナ（浄飯）と名づけたり。
われは美徳（善道）[70]を求めて，そこより出家したり。」

【王は言えり[71]】

174　30.「汝の知見はよく観察せられたるものにして，汝は正善なり。[72]
汝の出生の基たりしもの[73]，われもまたその弟子なり。
われ[74]，染愛[75]なき者（汝）を愛欲に招待したりとはいえ，
願わくは，われを深心より[76]忍受したまわんことを。

31. もしも汝によって菩提が證得せられたならば，
その時，法の支配者なる者（汝）は，われに分与を為したまえ[77]。
しかもまた，自存者よ，[汝が] この[78]わが領土に住したまうが故に，
われには，最高の利得がよく得られた [も同然な] り。」

32. それから更に，王は [菩薩の] 足下に敬礼し，
うやうやしく右遶を為したるのち，
人民の主（王）は，自らの眷属衆に囲繞せられて，
再びラージャグリハ（王舎城）に戻りたり。

---

[68] 発言者が菩薩から王へ交代するので，多くの写本に「王は言えり」(rājāha) が挿入されているが，幾つかの主要な写本には，この挿入部が欠けている。チベット訳においても，この部分を挿入している版本と省略している版本とがあり，いずれとも決しがたい。

[69] 上註68と同様であり，「菩薩は言えり」(bodhisattva āha) を挿入すべきか否か，いずれとも決しがたい。

[70]『中巻』には guṇa を「功徳」と訳したが，適訳でないと思われるので「美徳（善道）」と訂正する。

[71] 上註68と同様であり，「王は言えり」(rājāha) を挿入すべきか否か，いずれとも決しがたい。

[72] この一行は，方広には「善哉大導師」とのみ訳されている。

[73]『中巻』には「汝を生み育てたるところのもの」と訳したが，「汝の出生の基たりしもの」に訂正する。なお，方広にはこの行全体が「我本臣事汝」（我れ本汝に臣事せり）と訳されている。『国訳一切経』（本縁部九，148頁）参照。

[74] チベット訳には「われ」(maya) に当たる訳語がない。

[75]「染愛」とは「情欲が対象に染まって愛着すること。また，欲望の意」である。『佛教語大辞典』845頁参照。

[76]「深心より」(āśayenā) は，方広には「哀愍して」と訳されている。

[77]「われに分与を為したまえ」の部分のチベット訳は「法の分与を為したまえ」という意味の訳文になっている。

[78] チベット訳には「この」(iha) に当たる訳語がない。

33. 世間の庇護者（菩薩）は，マガダ［国］の町に入りて，
満足するまで，寂静なる心を以て安住し，
天神や人間たちに利益あらしめたるのちに，
人中尊（菩薩）はナイランジャナー[79]河の岸辺に赴けり。

［以上］「ビンビサーラ来詣品」と名づける第16章なり。

第17章（苦行品）[80]

176 実にまた，比丘らよ，その時，ウドゥラカ・ラーマプトラ[81]（ラーマの子ウドゥラカ）は，多くの弟子衆，七百名の弟子たちと共に，ラージャグリハ（王舎城）と名づける[82]大都城に依止して[83]住したり。彼は，彼ら（弟子衆）に〈非想非非想處[84]〉の戒行に相応する法を説けり。実にまた，比丘らよ，菩薩は，ウドゥラカ・ラーマプトラが僧団の主，集団の長，群衆の師にして，名声あり，尊重され，多くの人々に供養され，賢明にして，崇敬せられたるを見たり。また，［それを］見るや，彼（菩薩）はかくの如く思念したり。「さてもまた，このウドゥラカ・ラーマプトラは僧団の主，集団の長，群衆の師にして，名声あり，尊重され，多くの人々に供養され，賢明にして，崇敬せられたり。もし，われが彼（ウドゥラカ）のもとに赴きて戒行と苦行とを始めざるとすれば，彼はわれに対して『最勝なり』との思念を生じざるべし。また，現前知（面前での直接的知識）によっての理解を生じることなく，また，有為（生滅変化する無常の存在）にして有漏（煩悩の汚れを有する状態）なる，取著（執着の念）を有する禅定・三昧・等至[85]に対して非難が加えられざるべし。さればいざ，われは，かくの如き方便を示すべし。すなわち，それによって，彼らが禅定の境界（境
178 地）及び等至の所縁[86]に関して現前知を得たるものとなり，世俗的な三昧は出離（解脱の境地）に導くものにあらざることが示されるべきところの［方便を］。いざ，われは，ウドゥラカ・ラーマ

---

[79] 原文では韻律のために nirañjanā（ニランジャナー）と表記されているが，通常は nairañjanā（パーリ語では nerañjarā）と表記され，漢訳には「尼連禅河」と音訳される。方広はこの場面で「尼連河」と訳している。ナイランジャナー河は「釈尊が成道直前に浴した河」であり，「金流（こんる）」とも呼ばれる。「金流」とは「尊い川」「清き流れ」の意である。『佛教語大辞典』423頁参照。

[80] 方広にも「苦行品」と訳されている。

[81] udraka rāmaputra は「ラーマの子，ウドゥラカ」の意である。多くの写本は udraka を rudraka と記しているが，BHSD（Rudraka の項）に指摘されているように，rudraka は udraka の誤写であることが明らかである。出家後の釈尊が師事した２名のうちの一人である，この人の名はパーリ語では uddaka rāmaputta であり，漢訳の音写（方広「烏特迦」；普曜「鬱頭藍弗」）からも，その原語が udraka であったことに疑いはない。

[82] チベット訳には「名づける」（nāma）に当たる訳語がない。

[83]「依止」とは「たよる，よりどころとする」の意である。前章の註11を参照されたい。

[84]「非想非非想處」とは「表象があるのでもなく，表象がないのでもない三昧の境地」（『佛教語大辞典』1125頁参照）。なお，チベット訳には「處」（āyatana）に当たる訳語がない。

[85]「等至」（samāpatti）とは「身心の平等で安らかな状態」（『佛教語大辞典』1004頁参照）をいう。「無欲無心にして定まった境地」であり，禅定や三昧と同義語と見なしうるであろう。

[86]「所縁」（ārambaṇa）とは「心作用を引き起こす原因となるもの，認識の対象」を指す。

プトラのもとに赴きて，わが三昧の功徳の殊勝なることを顕示せんがために，［彼の[87]］弟子となることを忍受して，有為なる三昧の堅実ならざることを示すべし」［と］。

時に比丘らよ，菩薩は，この理由によるが故に，ウドゥラカ・ラーマプトラのいるところに近づけり。近づきて，ウドゥラカ・ラーマプトラに，かくの如く言えり。「卿よ，あなたの師は誰なりや。あるいは，誰によって示されたる法を，あなたは了知せるや」と[88]。

かくの如く言われて，ウドゥラカ・ラーマプトラは，菩薩にかくの如く言えり。「卿よ，われに師たる者は一人もなし。しかれども，われは自ら，これを正しく證得したり」［と[89]］。

菩薩は言えり。「あなたは何を了知したるや」。［彼は］言えり。「非想非非想處[90]の等至の道なり」。

菩薩は言えり。「【われは[91]】あなたより，この三昧の道の訓戒と教示とを得んことを欲す」。［彼は］言えり。「よろしい」と，乃至[92]（途中は省略して），訓戒が与えられたり。

それから，菩薩は一方に行き，結跏趺坐して坐せり。坐して間もなく，菩薩の福徳の殊勝なるこ
180 と，また，知の殊勝なること，また，前世に善修せる所行の果報の殊勝なること，また，一切の三昧の習熟の殊勝なること，また，もちろん［彼の[93]］心の自在なることの故に，幾百[94]もの世俗的な［超世俗的な[95]］等至の全てが，［それぞれの］様相を有し，特性をそなえて［心中に］現前したり[96]。

かくして菩薩は，正念かつ正知にして，座より立ち上がり，ウドゥラカ・ラーマプトラのいるところに近づき来たりて，ウドゥラカ・ラーマプトラにかくの如く言えり。「卿よ，非想非非想處の等至よりも上に，何か別の道ありや」。彼は答えたり，「あらず」と。

時に，菩薩はかくの如く思念せり。「ウドゥラカのみに《浄信[97]》，精進，正念，三昧，智慧あるにあらず。われにもまた浄信，精進，正念，三昧，智慧あり」［と］。

時に，菩薩はウドゥラカ・ラーマプトラにかくの如く言えり。「卿よ，あなたが證得せるところの法，それをわれもまた会得したり」［と］。彼は答えたり。「しからば，来たれ。御身とわれとで，これらの［弟子］衆を教導すべし」［と］。そして，菩薩を［自らと］同等なるものとして師の座に

---

[87] チベット訳には「彼の」に当たる訳語（deḥi）がある。

[88] チベット訳には「～と」（iti）に当たる訳語がない。

[89] レフマン校訂本にはiti（～と）が付加されているが，これは全写本に欠けているので，削除すべきである。

[90]「非想非非想處」の原文が，東大主要写本ではākiṃcanyāyatana（無所有處）とされているが，これは文脈上「非想非非想處」でなければならないから，チベット訳を参考に，諸刊本の校訂に従う。

[91]「われは」の原文vayaṃは東大主要写本には欠けている。なお，「われは……得んことを欲す」の原文labhemahi (vayaṃ)は複数形（opt. 1 pl.）であるから「われらは……得んことを欲す」の意となる。もし文脈により主語（菩薩）を単数とみるならば，vayaṃを削除しlabhemahiをlabheya hiと読むのが適切かもしれないが，ここでは単数形の代わりに複数形（いわゆる「威厳複数」の用法）が用いられているものとみなす。

[92] この場面での「乃至」（yāvad）は，「非想非非想處の三昧の方法に関する訓戒」について，その内容を省略する旨を示すものと思われる。

[93] チベット訳には「彼の」に当たる訳語（de）がある。

[94] チベット訳にはbrgya stoṅ（百千）と訳され，方広にも「百千」と訳されている。

[95] 写本には「超世俗的な」に当たる原語（lokottarāṇi）があるが，チベット訳にも方広にも，これに対応する訳語はなく，文脈上も削除すべきである。

[96]「等至の全てが」以下の部分は，方広には「隨彼諸定所有差別種種行相皆現在前（彼の諸の定に隨い，あらゆる差別，種々の行相，みな前に現在せり）」と訳されている。

[97]「浄信」（śraddhā）は東大主要写本に欠けているが，チベット訳によっても文脈上も必要である。なお，この語を含む直後の部分が，普曜には「藍弗無信。獨吾有信。藍弗無精進念定意智慧。獨吾有之」と訳されている。

就かしめたり。菩薩は言えり。「卿よ，この［非想非非想處の］道は厭離[98]に導かず，離欲に導かず，寂滅に導かず，寂静に導かず，神通（超越的知見）に導かず，等正覚に導かず，沙門道に導かず，【婆羅門道に導かず[99]】涅槃に導かざるなり」［と］。

かくして，比丘らよ，菩薩はウドゥラカ・ラーマプトラ[100]を，弟子ともどもに，よく誘引したる
182 のち，やがて「［これで］十分なり」と考えて，［そこから］去れり。「これ（非想非非想處）は，われには不要なり」とて[101]。

而して実に，その時，五群賢者[102]は，ウドゥラカ・ラーマプトラのもとにて梵行を修習しつつありき。彼らは，かくの如く思念せり。「われらが，そのために，長夜において（長期間にわたり）尋求し勤修したるも，極致あるいは究竟に到達することを得ざりし，それ（その境地）に，沙門ガウタマ[103]は労少なくして到達し，證得せり。されど，彼はそれに満足せず，さらにその上を希求せり。疑いなく，彼は世間の教師と成るべし。彼が證得するであろうところのもの，それを［彼は］われらにも分与すべし」と。かくの如く考えて，五群賢者はウドゥラカ・ラーマプトラのもとより去って，菩薩に従えり。

かくして，比丘らよ，《菩薩は[104]》望むがままに[105]ラージャグリハ（王舎城）に住したるのち，五群賢者とともに，マガダ国を遊行し，遍歴したり。

さてまた，その時，ラージャグリハとガヤー[106]との中間において，ある衆が宴を催したり。その衆からも，菩薩は，五群賢者とともに，休息と食物との供養を受けたり。[107]

かくして，比丘らよ，菩薩はマガダ国を遊歴しつつ，マガダ国のガヤー[108]なるところ，そこに赴き，そこに到達したり。実にまた，比丘らよ，菩薩は［煩悩の］断滅のために，ガヤー山の頂き[109]
184 に住したり。彼がそこに住したる時，かつて聞かれず，かつて知られざる〈三種の譬喩〉が［心に］顕現したり。［その］三種とは何か。実に，ある沙門・婆羅門たちは，諸愛欲から身体が離れることなく【住せり。】，《また》【諸愛欲から】心が離れることなくして住せり。しかもまた，彼らの愛

---

[98]「厭離」とは「世俗を厭い離れること」である。

[99]【　】内の原文は全写本に記されているが，文脈上不要であり，チベット訳にも方広にもこれに対応する訳文は見当たらないので，本来はなかったものと思われる。なお方広には，この箇所を含む前後の部分が「非為正路。非厭離法。非沙門法。非菩提法。非涅槃法」と訳されている。

[100]チベット訳には「ウドゥラカ」に当たる訳語のみがあり，「ラーマプトラ」に当たる訳語は欠けている。

[101]「弟子ともどもに」以下の部分のチベット訳は「弟子ともどもに，傾倒せしめたるのち，『これで十分なり』と満足して去るに至れり」という意味の訳文になっている。

[102]「五群賢者」（pañcakā bhadravargīyā）とは「後に仏陀釈尊の最初の弟子になる五名の修行者から成るグループ」のことである。方広には「五跋陀羅（ごばつだら）」と訳されている。

[103]釈尊の姓は，通常パーリ語発音で「ゴータマ」と呼ばれるが，本著では，梵原語 gautama をそのまま写して「ガウタマ」と表記する。

[104]「菩薩は」（bodhisattvo）は東大主要写本に欠けているが，チベット訳にはこれに当たる訳語がある。

[105]「望むがままに」（yathābhipretam）とは「心ゆくまで；好きなだけ」の意である。

[106]「ガヤー」（gayā）は，チベット訳に ri ga yā（ガヤー山）と訳され，方広にも「伽耶山」と訳されている。

[107]以上の「五群賢者がウドゥラカのもとから去って菩薩に従った」とする部分は，Mv(II. pp.119~123）の対応部分の記述には含まれていないから，後代に創作され挿入されたものであろう。

[108]この「ガヤー」（gayā）も，チベット訳には ri ga yā（ガヤー山）と訳されている。

[109]gayāśīrṣa parvata は「ガヤーの頭（ガヤーの峰）と呼ばれる山」の意であるが，ここでは「ガヤー山の頂き」と訳した。「ガヤー山（ガヤーの峰）」は「伽耶城の西南にある山」であり，「伽耶山」あるいは「象頭山（ぞうずせん）」と訳される。「象頭山」の名の由来は，その山に「象の頭に似た大岩」があったことによるとされる（赤沼智善編『印度佛教固有名詞辞典』201~202頁参照）。

欲への歓喜，愛欲への貪著，愛欲への願求，愛欲への飢渇，愛欲への渇望[110]，愛欲への迷悶[111]，愛欲への熱悩，愛欲への執着なるもの，それも鎮静せられずしてあれば，いかに彼らが自ら［の身体］を傷つけ，《身体を痛めつけて，》苦しく，激しく，恐ろしく，苛烈なる［苦の］感覚を受けようとも[112]，なお，その場合に，彼らは人間の法より上の，全く神聖なる最勝の知見を[113]證得すること能わざるなり。あたかも，ある人が火を必要とし，光明を欲し，光明を求めて[114]，彼が[115]湿った［下部の］材木と湿った［上部の］摩擦木とを取って，［それらを］水中に置いて鑽るが如くにして，彼は火を起こし火を発生せしめること能わず[116]。全く同様に，これらの沙門・婆羅門にして，諸愛欲から身体が離れることなく，また［諸愛欲から[117]］心が離れることなくして住し，しかも，彼ら
186 の愛欲への歓喜，愛欲への貪著，愛欲への願求，愛欲への飢渇，愛欲への渇望[118]，愛欲への迷悶，愛欲への熱悩[119]，愛欲への執着なるもの，それも鎮静せられずしてあれば，いかに彼らが自ら［の身体］を傷つけ，身体を痛めつけて，苦しく，激しく，恐ろしく，苛烈なる［苦の］感覚を受けようとも[120]，なお，その場合に［彼らは］[121]人間の法より上の，全く神聖なる最勝の知見を[122]證得すること能わず。これが，菩薩［の心］に顕現したる第一の譬喩なりき。

さらに，彼（菩薩）はかくの如く思念したり。これら沙門・婆羅門にして，諸愛欲より身体と心とが離れて住するも，彼らの愛欲への歓喜，云々と，全てが前述の如くなされて，乃至，火を求めるとしても，彼が湿った［下部の］材木を取って陸の上に置き，湿った［上部の］摩擦木で鑽るが如くにして，彼は火を起こすこと能わず。全く同様に，これらの沙門・婆羅門にして，云々と，全てが前述の如くなされて，乃至，人間の法より上の，全く神聖なる最勝の知見を[123]證得すること能わず。これが［菩薩の心に］顕現したる，かつて聞かれず知られざる，第二の譬喩なりき[124]。

---

[110] チベット訳には「愛欲への飢渇，愛欲への渇望」に対応する部分として ḥdod pa la skom pa（「愛欲への飢渇」または「愛欲への渇望」）の一語しかない。

[111] チベット訳には「愛欲への迷悶」に当たる訳語はない。

[112] 「苦しく……感覚を受けようとも」の部分は，チベット訳では「激しく，恐ろしく，苛烈なる苦の感覚を受けようとも」という意味の訳文になっている。

[113] 「人間の法より上の，全く神聖なる最勝の知見を」に該当するチベット訳は「すぐれた人間の法を超えて最高に達する，神聖なる最勝の知見を」という意味の訳文になっている。

[114] 「火を必要とし，光明を欲し，光明を求めて」の部分は，チベット訳にはただ「火を欲して」（me ḥdod la）とのみ訳されている。

[115] チベット訳には「彼が」（sa）に当たる訳語はない。

[116] 「火を起こし火を発生せしめること能わず」の部分は，チベット訳にはただ「火を起こすこと能わず」という意味の訳文になっている。

[117] チベット訳には「諸愛欲から」に当たる訳語（ḥdod pa rnams las）がある。

[118] チベット訳には「愛欲への飢渇，愛欲への渇望」に対応する部分として ḥdod pa la skom pa（「愛欲への飢渇」または「愛欲への渇望」）の一語しかない。

[119] 「愛欲への迷悶」と「愛欲への熱悩」は，チベット訳では前後入れ替わっており，「愛欲への熱悩，愛欲への迷悶」という意味の訳文になっている。

[120] 「苦しく……感覚を受けようとも」の部分は，チベット訳では「激しく，恐ろしく，苛烈なる苦の感覚を受けようとも」という意味の訳文になっている。

[121] チベット訳には「その場合に」（tarhi）に当たる訳語はなく，逆に「彼らは」に当たる訳語（de dag）があるので，原文を tarhi ではなく te hi と読むべきかもしれない。

[122] 上註113に同じ。

[123] 上註113に同じ。

[124] この部分を直訳すれば，「この，かつて聞かれず知られざる，第二の譬喩が［菩薩の心に］顕現したり」であるが，あえてこのように意訳した。

また次に，これら尊敬すべき[125]沙門・婆羅門にして，諸愛欲から身体と心とが離れて住し，さら
188 に，彼らの愛欲への歓喜，云々と，全て略して，それもまた彼らには鎮静せられたり。しかもまた，彼らが自ら［の身体］を傷つけ，身体を痛めつけて，《苦しく[126]，》激しく，恐ろしく，苛烈なる［苦の］感覚[127]を受けるならば，その時，実に彼らこそは，人間の法より上の，全く神聖なる最勝の知見を[128]證得すること能うべし。あたかも，ここに人ありて[129]，火を必要とし，光明を欲し，光明を求めて，彼が乾いた［下部の］木材と乾いた［上部の］摩擦木とを取って，陸の上に置いて鑽るが如くにして，彼は火を起こし，光明を発せしめることを得る。全く同様に，これら尊敬すべき[130]沙門・婆羅門にして，云々と，全て前述の如くにして，［苦の］感覚を受けるとすれば，その時なお，彼らこそは人間の法より上の，全く神聖なる最勝の知見を[131]證得すること能うべし。これが［菩薩の心に］顕現したる，かつて聞かれず，かつて知られざる，第三の譬喩なりき。

その時実に，比丘らよ，菩薩はかくの如く思念せり。「われは，今，諸愛欲から身体が離れ，また，［諸愛欲から］心が離れて住せり[132]。さらに，われの愛欲への歓喜，云々と，全て前述の如くにして，それもまた，われには鎮静せられたり。しかもまた，われが自ら［の身体］を傷つけ，身体を痛めつけて，苦しく，云々と，中略して，乃至，［苦の］感覚を受けるとすれば，その時，実に，われは人間の法より上の，全く神聖なる最勝の知見を[133]證得すること能うべし」［と］。

かくして実に，比丘らよ，菩薩は望むがままに，ガヤーのガヤーシールシャ山[134]（象頭山）に住したるのち，徒歩によって遊行遍歴しつつ，ウルヴィルヴァーのセーナーパティ[135]村なるところ，
190 そこに赴き，そこに到達したり[136]。そこにおいて［菩薩は］，水清くして，よき沐浴段があり[137]，端麗なる樹木と叢林に荘厳せられ，近隣に托鉢のできる村がある，ナイランジャナー河[138]を見たり。また，その時，菩薩の心は大いなる満足を生じたり。「まことに，この地処は平らかにして心地よく，独居黙考するに適したり。これは，断惑行[139]を願求する族姓子（善男子）[140]にとって充分なり。われもまた断惑行を願求するが故に，いざ，われは此処にこそ住すべし」［と］。

かくして実に，比丘らよ，菩薩はかくの如く思念せり。「われは，このジャンブドゥヴィーパ

---

[125]チベット訳には「尊敬すべき」（bhavantaḥ）に当たる訳語はない。

[126]「苦しく」（duḥkhāṃ）は東大主要写本に欠けているが，文脈上，またチベット訳によっても，これを挿入すべきである。

[127]「苦しく」以下の部分は，チベット訳では「激しく，恐ろしき苦の感覚を」という意味の訳文になっており，「苛烈なる」（kaṭukāṃ）に当たる訳語はない。

[128]上註113に同じ。

[129]チベット訳には単に「ある人が」（skyes bu shig）と訳されている。

[130]上註125に同じ。

[131]上註113に同じ。

[132]チベット訳は「諸愛欲から身体が離れて住し，諸愛欲から心が離れて住せり」という意味の訳文になっている。

[133]上註113に同じ。

[134]gayāśīrṣa parvata については，上註109を参照されたい。

[135]uruvilvā は地名，senāpati は村名であり，釈尊が苦行した場所である。ただし，方広には「優樓頻螺池側東面」と訳されている。

[136]チベット訳は「そこに赴き，到達したり」という意味の訳文になっている。

[137]「よき沐浴段があり」（sūpatīrtha）は，方広には「涯岸平正」と訳されている。

[138]nairañjanā（尼連禅河）については，上註79を参照されたい。

[139]「断惑行」（prahāṇa）とは「煩悩を断ずるための修行」の意である。

[140]「族姓子（善男子）」（kulaputra）には「良家の子；善良な紳士；立派な若者；正しい信仰を持つ人」などの意味がある。在家の男性信者に対する敬称として用いるが，菩薩に対して用いる場合もある。

（閻浮提）[141]に，五濁［悪世］[142]の時に来下せり。衆生は劣悪なるものを信解し，外道の衆に満ち，種々の邪見に陥り，身体に食物を摂ることに執着し[143]，愚者[144]たちは種々なる痛苦・熱苦［を受けること］によって身体の[145]清浄を求め，［その道を］教示せり。例えば，かくの如し。マントラ[146]（呪文）を用い，手を舐め，乞食をせず，言葉を話さず，種々の［植物の］根を食し，魚・肉を[147]食さず，雨季に外出せず，酒（スラー）[148]・糠・水を摂らず，1軒・3軒・5軒・7軒の家より食を受け，根・果実・シャイヴァーラ[149]（水草の一種）・クシャ草[150]・葉・牛の糞・牛の尿・乳糜・乳酪・酥[151]・甘蔗汁（さとうきびの濃汁）・生の粉を飲食し，鶴や鳩が噛み吐いたものを洗って食し，また，村住か林住（阿蘭若住）によって[152]生活し，牛戒行（牛の言動をまねる苦行）や鹿・犬・野猪（イノ
192 シシ）・猿・象の戒行を為し，直立し，沈黙し，勇者の如く坐し，また，一口［だけ］食し，乃至[153]，七口［だけ］食し，また，一昼夜の，乃至，四・五・六昼夜の間に一回だけ食し，また，半月の断食・ひと月の断食・月の行程に合わせる断食を為し[154]，また，禿鷲や梟の翼を身に着け，また，樹皮・ムンジャ草・アサナ樹[155]（亜麻？）の皮・ダルバ草・ヴァルヴァジャ草[156]・駱駝の毛皮・毛髪［製］の上衣・獣皮の衣服を纏い，濡れた布・露台の上・水中に横たわり，灰・砂利・石・板・棘・草の葉・棍棒の上に横たわり，倒立し，蹲坐し[157]，露地に横たわり，また，一枚の衣服，二枚，三枚，四枚，五枚，六枚，七枚，さらに多くの衣服を着け，また，裸体になり，是處（適当な場所）と非

---

[141] jambudvīpa（閻浮提：閻浮洲）は「須弥山の南方に位置するとされる大陸の名」である。人の住む四大洲の一つとされ，インド亜大陸からイメージされた人間世界を指す（第19巻第1号所載の拙訳［註124］参照）。

[142] 原語は pañcakāṣāya（五濁）であるが，方広には「五濁悪世」と訳されている。五濁とは「劫濁・見濁・煩悩濁・衆生濁・命濁の五つのけがれ」を指す。

[143] チベット訳は「執着する時に来たれり」という意味の訳文になっている。

[144]『中巻』には saṃmūḍha を「愚癡者」と訳したが，「愚者」に訂正する。意味は同じである。

[145] チベット訳には「身体の」（kāya）に当たる訳語はない。

[146] mantra は通常「真言」と訳され，「真実のことば」の意を有し，密教では「仏・菩薩など，およびそれらのはたらきを表示する秘密の語」とされるが，「不可思議な験を有する秘密語」として「呪詞：呪文」とも訳される（『佛教語大辞典』640頁「呪」；781頁「眞言」参照）。

[147] チベット訳には「肉・魚を」（śa daṅ ña）と訳されている。

[148]「仏典では酒は三つに類別される。食物からつくったスラー，果物および植物の茎や根を原料にしたマイレーヤ（maireya），以上の二者がまだよく発酵しない状態ではあるが人を酔わせるに足るマディヤ（madya）の三種。また穀酒・果酒・薬草酒の三種とすることもある」が，スラーは「穀酒」に当たる（中村元『佛教語大辞典』628頁「酒」；860頁「窣羅」参照）。

[149] śaivāla(= śaivala) は「青浮草（アオウキクサ）」の一種である。

[150]「クシャ草」（kuśa）については，第20巻第1号所載の拙訳（註436）を参照されたい。

[151]「乳糜」（pāyāsa）は「牛乳で煮た米（乳粥）」，「乳酪」（dadhi）は「牛乳を発酵させて飲みやすくしたもの（凝乳）」，「酥」（sarpis）は「精製された牛酪（バター）」である。

[152]『中巻』には「村と林野の［の両處］にて」と訳した（「林野の［の両處］」は「林野［の両處］」の誤記）が，原文（grāmyāraṇyābhiḥ ca vṛttibhiḥ）には「両處にて」の意味は含まれていないと思われるので，「村住か林住（阿蘭若住）によって」と訂正する。仏教僧伽には「村住比丘」と「林住（阿蘭若住）比丘」との区別があり，両者にはある意味の対立関係が見られたことが指摘されているが，この場合，どちらかを選ぶことが出家の作法とされていたものと思われる。辛嶋静志「初期大乗経典は誰が作ったか　―阿蘭若住比丘と村住比丘の対立―」（『佛教大学総合研究所紀要』2005［別冊2］所収）参照。

[153]「乃至」とは，この場合「二口から六口までの記述を省略する」との意である。

[154]「一昼夜の」以下の部分は，チベット訳には「食物を［一日に］一回摂り，一昼夜の，乃至，四・五・六昼夜の間隔をおいて食し，半月［に一回］の，あるいはひと月［に一回］の食事を為し，月の行程に合わせて断食し」という意味の訳文になっている。

[155]「アサナ樹」（asana）は，チベット訳には zar ma(= atasī：亜麻）と訳されている。

[156]「ダルバ」（darbha），「ヴァルヴァジャ」（valvaja; balbaja）ともに，一種の草（恐らく粗野な草）の名である。

[157]「蹲坐」（utkuṭuka）とは，相撲にいうところの「蹲居（そんきょ）」に近い姿勢の坐し方と思われる。

處（不適当な場所）[158]との規律を有し，髪・爪・顎鬚を長く伸ばして辮髪の髻を有し，なつめ・ごま・米の一粒だけを食し，灰・墨・供花の残余・煙煤・黒塵・砂塵・粘土を［全身に］塗り，身毛・［人の］頭蓋骨[159]・毛髪・爪・檻褸・泥・髑髏を持ち，熱湯・米の汁・褐衣[160]で漉した水・洗條後の［鍋
194 の中の］汚水[161]を呑み，炭・［赤い？］顔料[162]・袈裟[163]・三岐杖[164]・剃頭・水瓶・頭蓋骨[165]・寝台の脚を持って，愚者たちは［それぞれの行為に］清浄を感得する。煙を吸い，火焔を呑み，太陽を凝視し，五火[166]［の苦行］を修し，片足・腕揚げを持続し，一本足で立つこと［などの方法］によって[167]，苦行を積集する。籾殻等の炭[168]・焼けた壷[169]・焼けた石・燃える火焔に入り，食物を摂らず，砂漠や沐浴場に行って死ぬことにより，望ましい来世の境界[170]を求める。オームとの発声・ヴァシャットとの発声・スヴァダーとの発声・スヴァーハー[171]との発声・祈祷・讃辞・［祭壇の］薪積み[172]・［神々の］招請・真言（マントラ）の念誦・読誦［された文句］の記憶を為すことによって，［愚者たちはそれぞれの行為に］清浄を感得する。また，清浄なるアートマン［の存在］を考えて，それらに依存する。すなわち，ブラフマン・インドラ・ルドラ・ヴィシュヌ・デーヴィー・クマーラ・マートリ・カートヤーヤニー[173]・月・太陽・毘沙門天・ヴァルナ（水神）・ヴァーサヴァ[174]・アシュヴィン[175]［双神］・竜・夜叉・ガンダルヴァ（乾闥婆）・アスラ（阿修羅）・ガルダ（迦楼羅）・キンナラ（緊那羅）・マホーラガ（摩睺羅迦）・ラークシャサ（羅刹）・ブータ[176]（部多）・クンバーンダ（鳩槃

---

[158]「是處と非處」の原文 sthāna-asthāna については，『佛教語大辞典』（688頁「處非處」）に「有理と無理とのこと」として説明されているが，この意味では文意に合致しない。チベット訳によれば「沐浴と非沐浴」（snāna-asnāna）と読むべきであり，このほうが文脈上も適切であるが，写本の支持がない。

[159]muṇḍa は通常「禿頭」の意であるが，ここではチベット訳［miḥi thod pa］を参考に「［人の］頭蓋骨」と見る。

[160]「褐衣」とは「毛織の粗末な衣服」の意である。

[161]sthālīpānīya は「調理鍋の水」の意であるが，ここではチベット訳［khrud ma］を参考に「洗條後の汚水」と訳す。

[162]dhātu には「赤色の鉱物」の意があるが，チベット訳［tshon rtsi］は梵語 raṅga（色：染料）の訳語に当たるので，「顔料」と訳す。

[163]kāṣāya（袈裟）は通常，仏教僧の衣服（法衣）の呼称であるが，元来「赤褐色」の意味があり，「もとインドの猟師などが着ていたぼろの衣」のことであった。『佛教語大辞典』298頁参照。

[164]「三岐杖」（tri-daṇḍa）とは「杖の先が三つに分かれているもの。ヒンズー教の行者が手にするもの」である。『佛教語大辞典』459頁参照。

[165]「頭蓋骨」（kāpāla）は，チベット訳には「人の頭蓋骨」（miḥi thod pa）と訳されている。

[166]「五火」とは「身の回りの四方に火を燃やし，頭上の太陽の暑熱に身をさらす苦行」（五熱炙身）である。『佛教語大辞典』373頁「五熱炙身」参照。

[167]「片足」以下の部分がチベット訳では「片足と片手を上に揚げ，一本足で立ち，同一処にのみ住して」という意味の訳文になっている。

[168]「籾殻等の炭」のチベット訳は「籾殻など・焼けた炭」という意味の訳文になっている。

[169]dāhanikumbhasādhana は意味不明である。ここではチベット訳［bum pa bsregs pa］を参考に，kumbhasādhana を「壷」の意と見なし，「焼けた壷」と訳す。

[170]「境界」とは，この場合，「（善悪の行為の）果報として各自が受ける境遇」の意である。

[171]「オーム」以下の聖音の原語は，順次 oṃ, vaṣaṭ, svadhā, svāhā である。

[172]「薪積み」（cayana）は，チベット訳には sbyin sreg(= homa; 護摩）と訳されている。

[173]「ブラフマン」以下の神名の原語は，順次 brahman, indra, rudra, viṣṇu, devī, kumāra, mātṛ, kātyāyanī である。方広には kumāra, mātṛ, kātyāyanī に当たる箇所に「拘摩羅迦旃延摩致履伽」とあり，kumāra を「拘摩羅」，kātyāyanī を「迦旃延」，mātṛ を「摩致履伽」と音訳していることが分かる。

[174]vāsava とは「Vasu 神群」であり，神々の一部類（その数は通常８名）の名称である。インドラ神をその首長とするが，後世にはアグニ（火神）およびヴィシュヌ神がその首長とされる（『梵和大辞典』1183頁参照）。方広には「八婆蘇」と訳されている。

[175]aśvin は「暁の双生神」とされる。方広には「二阿水那」と訳されている。

[176]bhūta は「精霊：魔物：鬼類」の意とされ，「部多」「負多神」等と音訳される。方広には「歩多」と音訳されている。

荼）・プレータ[177]（餓鬼）・パールシャダ[178]（神々の従者）・ガナ[179]（低位の神群）・ピトゥリ[180]（祖先）・ピシャーチャ[181]（食肉鬼），また，神仙・王仙・梵仙などに帰命し，彼らを主要な実在であると妄想する。また，地・水・火・風・空［等の五大元素］に依存する。また，山・峡谷・川・泉・池・湖・沼・海・貯水池・井戸・蓮池・樹木・叢林・蔓・草・切株・牛舎[182]・墓地・十字路・三叉路・街路などに依止する。また，家・柱・石・杵・剣・弓・斧・矢・槍・三叉戟などに帰命する。また，乳酪・酥油・芥子・大麦・ドゥールヴァー草[183]・宝珠・金・銀などを吉祥なるものと考える。これ
196 らの外道たちは，輪廻の恐怖に怯えて，かくの如き類のことを実行し，あるいは依止する。

この世における，ある者〔男子[184]〕たちは，『われらの生天[185]と解脱とは，かくの如きによって成就すべし』と考えて，[186]邪道に赴き，帰依處ならざるものを帰依處と妄想し，吉祥ならざるものを吉祥と妄想し，清浄ならざるものを清浄と考える。さればいざ，われは，一切の外道異論が摧伏せられるべき，また，業と所作[187]とを忘失せる諸衆生に業と所作との消滅せざることを示すべき，また，禅定の境界[188]にある色界の天神たちを殊勝なる禅定を示すことにより善く誘引すべきところの，かくの如き，すぐれた禁戒と苦行とを勤修せん」と。

かくして，比丘らよ，菩薩はかくの如く思念して，六年の間，非常に激しく，甚だ行じ難く，極めて為し難き禁戒と苦行との難行を始めたり。何ゆえに難行と呼ばれるかと言えば，それは耐え難き苦痛なり。それ故に難行と呼ばれる。衆生界に存在する人間や魔物[189]にして，かくの如き難行を実修しうる，かくなる衆生は，〈呼吸停止（止息）[190]〉の禅定に入りたる最後身[191]の菩薩を除いて，

---

[177] preta は「逝きし者」の意で，「死者：亡霊」の意とされ，「祖父鬼」「餓鬼」等と訳される。「薜荔多（へいれいた）」と音訳されることもある（『佛教語大辞典』1205頁参照）。

[178] pārṣada は「集会の人員（会衆）；侍者；従者」の意であり，ここでは「神々の従者」を指すと思われる。

[179] gaṇa にも「群衆；集団；従者」の意があるが，ここでは「シヴァ神の従者の一員とされる低位の神群」を指すと思われる（『梵和大辞典』410頁参照）。

[180] ピトゥリの部分は，東大主要写本によれば preta であるが，これは直前の preta（餓鬼）と重複するので，チベット訳 mtshun（祖先・祖宗）を参考に pitṛ と読む。

[181] piśāca は「屍肉を喰らう悪鬼」であり，漢訳仏典では「持国天所領の鬼」とされる（『佛教語大辞典』1119頁参照）。

[182]「牛舎」（goṣṭha）は，チベット訳には単に lhas(= śālā；小屋）と訳されている。

[183] dūrvā とは「祭式に用いられる草の名」である。

[184]「男子」に当たる部分に，多くの写本が putrair を挿入しているが，これは文脈上不要であり，チベット訳にもこれに当たる訳語は見当たらない。

[185]『中巻』には svarga を「昇天」と訳したが，「生天」に訂正する。「生天」とは「天界に再生すること」である。

[186] チベット訳には，この箇所に de ltar（かくして）が挿入されている。

[187]『中巻』には karma-kriyā を「業と所作（義務）」と訳したが，「（義務）」を削除する。「業」（karman）とは「ある結果を生ずる原因としての行為」であり，「身・口・意によってなす善悪の行為が後に何らかの果報をもたらす潜在的動因として働くこと」をいう。この場合の「身・口・意の行為」を「能作」と呼ぶのに対して，それが発動した結果としての動作・行為を「所作」（kriyā）という。「能作」とは「潜在的動因として蓄積されてきた行為（業）」であり，「所作」とは「具体的結果として表出された顕在的行為」である。方広には「業果報（業の果報）」と訳されている。

[188] この場合の「境界」（gocara）は「心の状態，境地」の意である。

[189] この場合の「魔物」（a-manuṣya）は「人間にあらざるもの」の意である。

[190]「呼吸停止」（āsphānaka）は，チベット訳［mkhaḥ khyab］によれば āsphāraṇaka(= āspharaṇaka；虚空遍満）と読むべきであるが，写本の支持がない。この後，この梵語とチベット訳との不整合は一貫して同じであり，BHSD は āsphānaka と āspharaṇaka とを同一視している。方広には「我今住彼不動三昧。……猶如虚空遍於一切無能變異。此定名為阿娑婆那（我れ今彼の不動三昧に住して，……猶，虚空の，一切に遍くして能く變異すること無きが如し。この定を名けて，阿娑婆那と為す」（『大正大蔵経』第三巻581中）と訳されている。『仏本行集経』でも「不動三昧」と呼ばれている（『大正大蔵経』第三巻766中～下）。

[191]「最後身」とは，「この世でさとりを開いて，もはや生まれかわることのないこと」であり，「最後生」ともいう（『佛教語大辞典』445頁参照）。

一人も存在せず。何ゆえに「呼吸停止」と呼ばれるかといえば，彼（菩薩）は，まず第一に，第四
198 の禅定に入りたる時，入息出息を抑圧して停止させる。その禅定は妄念なく，妄分別[192]なく，不動
にして，意識なく，変化することなく，一切のものに随入し，一切のものに依止せず，また[193]，その禅定は，いまだかつて，有学，無学[194]，独覚（縁覚），あるいは，正行の道に入りたる菩薩の，誰によっても全く経験せられざるものなり。さらにまた，《呼吸停止は》「虚空」とも呼ばれ[195]，充溢することなく，作為なく，変化することなく[196]，しかも，それは一切に遍満するが故に，実に，その禅定は虚空の如くなり。それ故に「呼吸停止」[197]と呼ばれる。

さてまた，比丘らよ，菩薩は，世間に不可思議を顕示するために，また，諸外道の傲慢を除去するために，また，諸異学を摧伏するために，また，諸天神をよく誘引するために，断見や常見[198]を説いて業と所作とを忘失せる諸衆生に業と所作とを深く理解させるために，福徳の果報を宣揚するために，正智[199]の果報を顕示するために，禅定の要素を区別（分析）するために，身体の力と強さを顕示するために，また，精神の勇気を生ぜしめるために，整地せざる自然の大地の上に結跏趺坐して坐したり。坐して，また，自らの身体を心によって抑制し逼悩[200]せしめたり。

それから比丘らよ，われは[201]，［厳寒なる］冬季の［満月後］第八日目の夜，同様に，身体を抑制し逼悩せしめたる時に，両腋からも汗が流れ出て，また額からも汗が流れ出て，《地面に落ちて[202]》結露し，熱を帯びて蒸気を発したり。あたかも，剛強なる者が非常に虚弱なる者の頸を捕らえて圧
200 迫するが如く，まさにその如く，比丘らよ，この［われの］身体を心によって抑制し逼悩せしめたる時，両腋からも汗が流れ出て，また額からも汗が流れ出て，地面に落ちて結露し，熱を帯びて蒸気を発したり。

比丘らよ，その時，われはかくの如く思念したり。「いざ，われは呼吸停止の禅定[203]を修習すべし」［と］。それから比丘らよ，われは，呼吸停止の禅定を修習せる時，口からも鼻からも入息と出息との［両方ともに］停止したり。［すると］両耳孔より高い音・大きな音[204]を発したり。あたかも，鍛冶屋のふいごが吹かれる時に高い音・大きな音が出るが如く，まさにその如く，比丘らよ，口と鼻［の両方］からの入息出息を停止したる時，両耳孔より高い音・大きな音を発したり。

比丘らよ，その時われは，かくの如く思念したり。「いざ，われは，さらにいっそう，呼吸停止

---

[192]「妄分別」とは「主・客対立的に物事を認識する主観のはたらき」をいう（『佛教語大辞典』1364頁参照）。

[193]チベット訳には「また」（ca）に当たる訳語はない。

[194]「有学」とは，部派仏教における声聞（自己の悟りを求める修行者）の到達すべき四果（預流果・一来果・不還果・阿羅漢果）のうち，「最後の阿羅漢果を得ていないため，さらに修学を必要とする者」をいい，「無学」とは「阿羅漢果を得て，もはや学ぶべきものを残していない聖者」をいう。

[195]「呼吸停止は」（āsphānaka）は東大主要写本には欠けており，またチベット訳では，「さらにまた」以下の部分が「虚空とは天空にして」という意味の訳文になっている。

[196]「変化することなく」（avikaraṇaṃ）は，チベット訳には「散乱することなく」（rnam par mi mthor ba）と訳されている。

[197]文脈上，この「呼吸停止」は「虚空遍満」と訳すのが適切であるように思われる。

[198]「断見」とは「人は一度死ぬとそのまま断滅するとして，因果応報を認めない見解」であり，「常見」とは「人の自我（霊魂）は滅びることなく永遠に存続するとして，無常無我を認めない見解」である。

[199]『中巻』には jñāna を「智慧」と訳したが「正智」に訂正する。智慧（prajñā）と「正智」（jñāna）との相違については，第19巻第1号所載の拙訳（註77）を参照されたい。

[200]「逼悩」とは「無理に苦しめること」である。

[201]この場面で，再び主語の表現が「菩薩は」から「われは」に変化している。上註15参照。

[202]《　》内の原文は東大主要写本に欠落しているが，文脈上もチベット訳によっても挿入すべきである。

[203]この「呼吸停止の禅定」も，チベット訳には「虚空遍満の禅定」と訳されている。上註190参照。

[204]「高い音・大きな音」は，チベット訳では「激しい大きな音」という意味の訳文になっている。

の禅定を修習すべし」と。それから，われの口と鼻と耳とを閉塞したり。それらを閉塞せる時，［体内の］風は上方において頭蓋骨を打てり。比丘らよ，あたかも，ある者が尖鋭ならざる槍を以て頭蓋骨を打つが如く，まさにその如く，比丘らよ，口と鼻と耳における入息出息を閉塞したる時，上方において頭蓋骨を打てり。

そこにおいて，ある天神たち[205]は，菩薩のこの状態[206]を見て，かくの如く言えり。「ああ悲しき
202 かな。このシッダールタ王子は，あわれにも[207]命終（死亡）せり」。他の者たちは，かくの如く言えり。「これは命終したるにあらず。而して，これは，阿羅漢たちが禅定に住する時の通常の様式なり[208]」と。［彼らは］その時，かくの如き偈を唱えたり。

1．この，シャーキヤ（釈迦）王の息子たる者が，
念願を成就せず，目的も達せずして，
苦悩する三界を庇護者なきものとなしたまま，
この荒野にて[209]，命終したまうことのなからんことを。

2．おお，堅実なる衆生よ，誓言の確固たる者よ，
往昔[210]，われらは兜率天にて，庇護者たる御身によって[211]，
正法の祭式に招待せられたり。
清浄なる衆生よ，御身の，あの誓言はいずこにありや。

それから，かの天子たち[212]は三十三天界に行き，マーヤー妃にこれらの経緯を知らせたり，「王子は命終したまえり」［と］。

そこでマーヤー妃は，アプサラス（天女）衆に囲繞せられて，真夜中時に，ナイランジャナー河の岸辺の，菩薩の居るところに近づきたり。彼女は，身体枯渇して命終したるが如き菩薩を見たり。［それを］見て，［マーヤー妃は］涙で喉を詰まらせながら，泣き始めたり。

204 また[213]，その時，次の如き偈を唱えたり。

3．ルンビニーと名づける森にて，私の息子として生まれし時，
獅子の如くに，支えられることなくして，汝は自ら七歩を歩行したり。

4．［そして］四方を観察して，汝は浄妙なる語を発したり。
「これはわが最後の生なり」と。それは汝によって成就せられざりき。

5．アシタ仙は，汝が世間において仏陀に成らんと告げたりしも，
彼の授記は[214]破れたり。彼は［世間の］無常性を見ざりき。

---

[205]「天神たち」（devā）は，チベット訳には「天子」（lhaḥi bu）と訳されている。

[206]「状態」（avasthā）は，チベット訳には「病状」（na ba）と訳されている。なお，この場面から主語が再び「菩薩」に戻っている。

[207]チベット訳には「あわれにも」（bata）に当たる訳語はない。

[208]チベット訳は「これは命終したるにはあらずして，禅定に住する阿羅漢たちの［修行の］方法がかくの如くなり」という意味の訳文になっている。

[209]『中巻』には不注意により「この荒野にて」の訳文が脱落しているので，補足する。

[210]「往昔」とは「むかし」の意である。「おうせき」「おうじゃく」とも読む。

[211]チベット訳は「庇護者によって」という意味の訳文になっており，「御身」（te）に当たる訳語はない。

[212]「天子たち」（devaputrā）は，チベット訳には「天神」（lha）と訳されている。上註205参照。

[213]「泣き始めたり。また」の部分が，チベット訳には「泣いたのち」（ṅus nas）と訳されている。

[214]「授記」（vyākaraṇa）は通常，「仏が弟子に，未来には仏に成れるであろうという保証を与えること」（『佛教語大辞典』

6．［私の］息子は，喜ばしき転輪聖王[215]の栄光をも享受せず，
　また，菩提を證得することもなくして，森にて死に赴けり。
7．息子のために誰かを頼って苦悩せる私は，誰に哀願すべし。
　息もたえだえの私の一人息子に，誰が命を与えるならん。
菩薩は言えり。
8．非常に悲しげに泣いている，この人は誰か。
　髪を振り乱し，優雅さを失い，
　激しく息子を悲歎して哀哭し，
　地面に坐して身もだえするは。
マーヤー妃は言えり。
206　9．私によって，十ヶ月の間，金剛の如き［汝］が懐胎せられたり。
　息子よ，私は汝の[216]，かの母にして，深く悲しみ哀哭せり。

その時，菩薩は《母を[217]》慰めて告げたり。「息子を愛する者よ，恐れるなかれ。［われは］あなたの労苦を実りあるものとなすべし。仏陀（成仏）にとって[218]世俗的欲望の放棄は有意義なり。また，［われは］アシタ仙の予言を実現し，【また】ディーパンカラ（燃燈仏）の授記を実現すべし。

10[219]．たとい大地が百の断片に裂けようとも，
　宝の峰なるメール山が水に浮かぼうとも，
　日・月・星辰が大地に落ちようとも，
　凡夫のままにては，われは決して死なざるべし。
　それ故に，今や，あなたは悲しむことなかれ。
　久しからずして，［あなたは］仏菩提（仏陀の悟り）を見るならん。」

［これを］聞くや否や，マーヤー妃は歓喜して身毛竪立し，菩薩にマーンダーラヴァ[220]（曼陀羅）の花を撒き散らして，右遶三匝し[221]，天上の楽器を奏でつつ，自らの宮殿のあるところへと帰り行けり。

比丘らよ，その時[222]われは，かくの如く思念したり。「わずかの食物を摂ること（断食行）を清浄と考えるところの，或る沙門や婆羅門たちが存在する。さればいざ，われは断食行を実修すべし」

641頁参照）であるが，ここでは「王子に対する仙人の予言」として用いられている。なお，チベット訳には「授記も」（luṅ bstan pa yaṅ）と訳されている。

[215]「転輪聖王」については，第19巻第1号所載の拙訳（註91）を参照されたい。

[216] チベット訳には「汝の」（te）に当たる訳語はない。

[217]「母を」の原語（mātaram）は，文脈上，またチベット訳を参考に，挿入すべきであるが，写本の支持がない。

[218]『中巻』には「仏陀［となるため］の」と訳したが，「仏陀（成仏）にとって」に訂正する。チベット訳は「仏陀に成らんがためには」という意味の訳文になっている。

[219]この偈の韻律は6行から成るUpajātiである。

[220]māndārava（曼陀羅華）は「色よく，芳香を放ち，高潔でこれを見る者の心を喜ばせるといわれる天界の花」である（『佛教語大辞典』1285頁参照）。

[221]「右遶三匝」とは「［神聖なものを］右回りに三周すること」である。

[222]チベット訳には「その時」（tasya）に当たる訳語はない。なお，この場面から主語は再び「われは」に変わっている。

208 と。比丘らよ，われは，ただ一粒の棗の実を食物として一個だけ食することを決意せり[223]。しかるに，比丘らよ，汝らにかくの如き心念あらん。［すなわち］「その時の棗の実はきわめて大なるものなりけむ[224]」と。しかし，そのように見られるべきにあらず。而して実に，その時の棗も今［の棗］と同じほどなりき。その時われは，比丘らよ，ただ一粒の棗の実を食物として一個だけ食したれば，身体は極度に衰弱し，痩せたり。比丘らよ，あたかもアーシータキー[225]茎の節，あるいはカーラ[226]茎の節の如く，われの身体部分と各肢節は，まさにその如くになれり。あたかもカルカタカ[227]（蟹）の肋骨の如く，《われの[228]》肋骨も，まさにその如くになれり。あたかも，老朽化して両側から破れた荷馬車小屋や象小屋の，梁の骨組みの間が光って見えるが如く，まさにその如くに，《われの[229]》肋骨は［前後の］両側から体内が光って，明るく見えたり。あたかも，綴られた珠数がでこぼこにして，滑らかに且つざらざらになれるが如く，その如く，われの背骨はでこぼこにして，滑らかに且つざらざらになれり。あたかも，若くて苦い瓢箪が切られて萎れ，《しぼんで，[230]》空の椀器の如きもの[231]《になれる[232]》が如く，まさにその如くに，【われの[233]】頭は萎れ，しぼんで，空の椀器の如きものになれり。あたかも，夏季の最後の月に［水が少なくなり］，井戸の［中に映る］星が[234]底深くに沈み，辛うじて見えるが如く，まさにその如く，われの眼の瞳は孔奥にくぼみ，辛うじて見えたり。あたかも，山羊の足，あるいは，駱駝の足の如く，まさにその如くに，われの腋・腹・胸
210 等はなれり。それ故，比丘らよ，われが手で腹をなでようとすれば，背骨に直に触れたり。立とうとして起き上がらんとするも，そのまま，うつ伏せに倒れたり。辛うじて起きたるも，埃にまみれた身体を手で掃うや，われの[235]腐敗せる身毛は[236]身体から落ちたり。かつてのわが身色は優美なりしも[237]，それも消失せり。言うまでもなく，苛烈なる勤行に自ら専念したるが故に。また，われの托鉢村[238]に住する近隣の者たちも，[239]かくの如く認識せり。「ああ実に，沙門ガウタマは黒い。ああ実に，沙門ガウタマは青黒い。ああ実に，沙門ガウタマはマドゥグラ［魚］[240]の肌色の如し。かつ

---

[223] チベット訳は「われは決意して，ただ一粒の棗の実を一個だけ食したり」という意味の訳文になっている。

[224] チベット訳は，単に「その時の棗の実は大きかった」という意味の訳文になっている。

[225] āsītakī(= āśītakī) は「植物の名」（cf. BHSD,āśītakī）であり，これに当たるチベット訳［ldum bu］は「茎状植物の名」である。方広には「阿斯樹」の訳語が見られる。

[226] kāla も同じく「植物の名」である（cf. BHSD,kāla）。チベット訳［ka li kaḥi］によれば kālikā と読むべきであるが，写本の支持がない。方広には「如筇竹節（筇竹の節の如く）」という訳文が見られる。

[227] karkaṭaka はチベット訳には srog chags kar ka ta ka（カルカタカ虫）と訳されている。

[228]「われの」（me）は，多くの写本に欠落しているが，文脈上，チベット訳に従って挿入すべきである。

[229]「われの」（me）は，東大主要写本に欠落しているが，文脈上，チベット訳に従って挿入すべきである。

[230]「しぼんで」（saṃmlānaḥ）は東大主要写本に欠けているが，チベット訳によれば挿入すべきである。

[231] チベット訳には「～の如きもの」（-jātaḥ）に当たる訳語は見当たらない。

[232]「～になれる」（bhavati）は東大主要写本に欠けている。

[233]「われの」（me）は T3以外の写本に欠けているが，チベット訳によれば挿入すべきである。

[234] 方広には「如井底星（井底の星の如く）」と訳されている。

[235] チベット訳には「われの」（me）に当たる訳語はない。

[236] チベット訳は「身毛は全て」という意味の訳文になっており，「全て」（thams cad）が挿入されている。

[237] チベット訳は「わが身色は艶やかにして優美なりしも」という意味の訳文になっており，「艶やかにして」（mdses śiṅ）が挿入されている。

[238]「托鉢村」（行乞村）とは「修行者が乞食のために托鉢に行く村」の意である。

[239] チベット訳には「その時」（de la）が挿入されている。

[240] madgura はチベット訳には ña mad gu ra（マドゥグラ魚）と訳されている。

ての彼の，かの[241]明浄なる[242]身色の輝き，それも消失したり」［と］。

比丘らよ，その時われは，かくの如く思念したり。「いざ，われは，さらにいっそう烈しく，断食行を実修すべし」と。比丘らよ，われは，ただ一粒の米を食物として一個だけ食することを決意せり[243]。比丘らよ，汝らにかくの如き［心念］があるべし，「その時の米粒はきわめて大なるものなりけむ」と。しかし，そのように見られるべきにあらず。而して，その時の米粒も，今のものと同じほどなりき。比丘らよ，その時われは一粒の米を食物として食したれば，身体は直ちに，云々と，前述の如くにして，乃至，「ああ実に，沙門ガウタマはマドゥグラ［魚］の肌色なり」と［続き］，「《かつての[244]》彼の《かの[245]》身色は優美なりしも[246]，それも消えたり」［というところまで同じ］。

212

比丘らよ，その時われは，かくの如く思念したり。「いざ，われは，さらにいっそう烈しく，断食行を実修すべし」と［いうところから］，比丘らよ，われはただ一粒の胡麻を食物として一個だけ食することを決意せり，等々と［略して］彼の《優美なる[247]》身色，それも消えたり」というところまで［同じ］。

比丘らよ，その時われは，かくの如く思念したり。「全く食さざることを清浄と考える，或る沙門や婆羅門たちが存在する。さればいざ，われは，まったく完全に断食を実修すべし」と。比丘らよ，それから，われは[248]［完全なる］断食を遂行したり。比丘らよ，その時われは［完全に］断食したれば，身体は極度にひからび，衰弱して，痩せたり。あたかもアーシータキー茎の節，あるいはカーラ茎の節の，それより二倍・三倍・四倍・五倍・十倍までに，われの身体部分と各肢節は痩せたり。たとえば《肋骨は[249]》カルカタカ（蟹）の肋骨，あるいは，荷馬車小屋の梁の骨組み［の如く］[250]，背骨は二重巻きに綴られた珠数《の如く[251]》，頭蓋骨は苦い瓢箪の如く，瞳孔は井戸の［中に映る］星の如くになれり。比丘らよ，われが，しっかり立とうとして，身体を起こさんとするも[252]，うつ伏せになって倒れたり。辛うじて起きたるも，埃にまみれたる，われの[253]身体を［手で[254]］掃うや，根の[255]腐敗せる身毛は［すべて身体から[256]］落ちたり。［かつて[257]］われにありしところの，かの[258]優美なる身色[259]，それも消えたり。言うまでもなく，苛烈なる勤行に自ら専念したる

---

[241]チベット訳には「かの」（sā）に当たる訳語はない。
[242]「明浄なる」の部分は，チベット訳には「艶やかにして優美なる」という意味の訳文になっている。
[243]チベット訳は「われは決意して，われは食物として，ただ一粒の米を一個だけ食したり」という意味の訳文になっている。
[244]「かつての」（paurāṇā）はT2以外の写本に欠落しているが，チベット訳によれば挿入すべきである。
[245]「かの」（sā）は全写本に欠落しているが，チベット訳によれば挿入すべきである。
[246]「優美なりしも」の部分は，チベット訳には「艶やかにして明浄なりしも」という意味の訳文になっている。
[247]「優美なる」（śubha）は東大主要写本に欠けているが，文脈上，チベット訳に従って挿入すべきである。
[248]チベット訳には「われは」（ahaṃ）に当たる訳語はない。
[249]「肋骨は」（pārśve）は東大主要写本に欠けているが，チベット訳によれば挿入すべきである。
[250]チベット訳には「梁の骨組み」（gopānasī）に当たる訳語はなく，「荷馬車小屋の如くになれり」という意味の訳文になっている。
[251]「～の如く」（-vat）は東大主要写本に欠けているが，文脈上，チベット訳に従って挿入すべきである。
[252]チベット訳は「身体を動かしても」という意味の訳文になっている。
[253]チベット訳には「われの」（me）に当たる訳語はない。
[254]チベット訳には「手で」に当たる訳語（lag pas）がある。
[255]チベット訳には「根の」（mūla）に当たる訳語はない。
[256]チベット訳には「すべて身体から」に当たる訳語（thams cad lus las）がある。
[257]チベット訳には「かつて」に当たる訳語（sṅon）がある。
[258]チベット訳には「かの」（sā）に当たる訳語はない。
[259]チベット訳は「［わが］身色は艶やかにして優美なりしも」という意味の訳文になっている。

が故に。また，われの托鉢村に住する近隣の者たちも，かくの如く認識せり。「ああ実に，沙門ガ
214 ウタマは黒い。ああ実に，沙門ガウタマは青黒い。ああ実に，沙門ガウタマはマドゥグラ［魚］の肌色の如し。かつての彼の，かの[260]明浄なる身色の輝き，それもまた消失したり」［と］。

その時，シュドーダナ王（浄飯王）もまた，毎日，菩薩のもとに使者を送りたり。

比丘らよ，かくの如く，菩薩は，世間に奇特なる所行を顕示するために，業と[261]所作とを忘失せる諸衆生に，業と所作とをよく理解させるために，また，福徳の集積［の果報］を宣揚するために，また，偉大なる正智[262]の功徳を顕示するために，また，禅定の諸要素の区別（分析）のために，一粒の胡麻・棗・米によって六年間，苦行を顕示して，心は怯弱[263]ならざりき。菩薩は，六年間，［最初に］坐したるがままに，結跏趺坐して坐し続け，しかも威儀を失うことなかりき。日向より蔭に行くことなく，蔭より日向に行くこともなかりき。また，風・日光・雨から避難することもなかりき。また，虻・蚊・蛇蝎類を追い払わざりき。また，大便・小便・痰・鼻涕[264]を出さざりき。また，［身を］縮めることも伸ばすこともなかりき。脇・腹・背を下にして横たわることもなかりき[265]。また，〔かの〕大雲[266]・驟雨[267]（にわか雨）・雨・稲妻・秋季・夏季・冬季［の気候］なるところのもの，それらも菩薩の身体に降りかかりたり[268]。されど，菩薩は手によってすらも［わが身を］蔽うことなかりき。感官を閉じることなくして，［しかも］感官の対象［からの影響］を感受せざりき[269]。また。そこに来たれる，村の少年たち，あるいは，村の少女たち，あるいは，牧牛者たち，あるいは，牧畜者たち，あるいは，草を運ぶ者たち，あるいは，材木を運ぶ者たち，あるいは，牛糞を運ぶ者
216 たち，彼らは菩薩を塵塊のピシャーチャ[270]（食肉鬼）と考えたり。また，彼（菩薩）に戯れて，彼に土を擦りつけたり。

かくして，菩薩は，その六年間において，しばらく，身体の粗悪・劣等・虚弱なる者となれり。そのために[271]，彼の両耳孔より草や綿を入れると両鼻孔より出で来たれり。両鼻孔より草や綿を入れると両耳孔より出で来たれり。両耳孔より草や綿を入れると口より出で来たれり。口より入れると耳孔と鼻孔より出で来たれり。［一方の］鼻より入れると，耳と［他方の］鼻と口より出で来たれり。

また，天・竜・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅迦の［八部］衆，〔人間や魔物たち[272]〕彼らは菩薩の功徳を現前に見て，昼夜に（一日中）とどまりて菩薩の供養をなせり。また，

---

[260] チベット訳には「かの」（sā）に当たる訳語はない。

[261] チベット訳には「業と」（karma-）に当たる訳語が欠落している。

[262]『中巻』には jñāna を「智」と訳したが「正智」に訂正する。上註199参照。

[263]「怯弱」とは「心がおびえ弱々しいこと」である。

[264]『中巻』には「鼻汁」と訳したが，「鼻涕」に訂正する。意味は同じである。

[265] チベット訳は「脇を下に向けたり，うつ伏せになったり，仰向けになったりすることなくして坐し続けたり」という意味の訳文になっている。

[266]「大雲」（mahā-megha）とは「濃密な黒雲」であり，「雨を降らせる叢雲」である。『佛教語大辞典』912頁「大雲輪」参照。

[267] チベット訳には「大驟雨」（yul ṅan chen po）と訳されている。

[268]「降りかかりたり」の部分は，チベット訳には「影響を与えざりき」（ma phog go）と訳されており，梵文と合わない。これはチベット訳の誤訳によるものと思われる。

[269]『中巻』には「感官の対象を執らざりき」と訳したが，分かりにくいので「感官の対象［からの影響］を感受せざりき」に訂正する。

[270] piśāca は「屍肉を喰らう悪鬼」とされる（『佛教語大辞典』1119頁参照）。

[271] チベット訳には「そのために」（yad）に当たる訳語はない。

[272]「人間や魔物たち」（manuṣyāmanuṣyāḥ）は多くの写本に挿入されているが，チベット訳にはこれに当たる訳文はない。

誓願を立てたり。そこにおいて，菩薩が，その[273]六年間，苦行を顕示したるが故に，総計十二那由多[274]に達する天神や人間が，三乗[275]に教化せしめられたり。

そこで，かくの如く言われる。

11. 功徳を具えたる，かの菩薩が，城邑より出たる時に，
衆生の利益と安楽のために，方便と結合せる思念が生じたり。

218 12. 五濁悪世[276]の時代にて，《世間が[277]》劣悪なる法を信解せる時，
世間が業と所作とを無視せる時に[278]，［われは］この閻浮提に生まれたり。

13. 外道の衆に満ち満ちて，彼らは奇行や祈願祭式に専念せり。
身体を傷害することを以て，愚者たちは「清浄（なる行為）」と考える。

14. 火・砂漠・深坑[279]に入り，裸体に土や塵灰等[280]を塗り，
身体を苦しめんがために，五火のヨーガ[281]（瑜伽行）に専心せり。

15. ［常に］身体を広げ伸ばして行動し[282]，ある愚者たちは手を舐める。
また，瓶の口・盆からは［食物を］受けず，門や柱を隔てては［食物を］受けず。

16. 犬が居るところ［の家］からは［食物を］受けず，
「いざ来たれ」との声，「待て」との言葉によっては［食物を］受けず。
一軒の家のみから乞食し[283]，これを以て自らを清浄なりと信ずる[284]。

17. 酥油・胡麻油・甘蔗汁・乳酪・牛乳[285]・魚肉・獣肉を拒否して，
稗穀・蔬菜を食し，蓮根・黍稷[286]・屑米を食する。

18. 根・木の実・葉［のみ］を食し，また，クシャ草・襤褸・獣皮・褐衣[287]を身に着け，
他の者たちは裸体で遊歴し，愚者たちは「これが正しく，他は誤りなり」と［考える］。

後代に挿入されたものと思われる。

[273]チベット訳には「その」（taiḥ）に当たる訳語はない。

[274]「十二那由多」は通常「一億二千万」あるいは「一兆二千億」とされるが，この場面の方広には「十二絡叉（百二十万）」と訳されている。なお，『中巻』の脚注(201)に「この場面の方広の漢訳は「絡叉」（十万）となっている」と記したが，これは「十二」を見落としたための誤りである。

[275]「三乗」とは「声聞乗・縁覚乗・菩薩乗という三つの実践のしかた」「声聞・縁覚・菩薩の三者の能力に応じて，さとりに導いていく教えを乗り物にたとえた語」である。『佛教語大辞典』476頁参照。

[276]「五濁悪世」とは「五つのけがれ（五濁）に満ちている悪しき世」の意である。上註142参照。

[277]「世間が」（loke）は全写本に欠落しているが，文脈上も韻律的にも，チベット訳に従って挿入すべきである。

[278]『中巻』には「放棄せる時に」と訳したが，「無視せる時に」に訂正する。

[279]チベット訳は「深坑・火・砂漠」の順になっている。なお，「深坑」（prapāta）とは「断崖に囲まれた深いくぼみ」である。

[280]「塵灰等」（bhasmâdi）は，チベット訳には「牛糞」（lci ba）と訳されている。

[281]「五火のヨーガ」（pañcātapayoga）とは「五熱炙身の苦行」を指す（上註166参照）。方広にも「五熱以炙身」と訳されている。

[282]チベット訳は「手を広げ伸ばして遊行し」という意味の訳文になっている。なお，『仏本行集経』の当該部分（『大正大蔵経』第三巻766中）には「有攀其両臂而住」との訳文が見られる。

[283]チベット訳は「家から一食を受けることによって」という意味の訳文になっている。

[284]『中巻』には「ここにおいて「清浄になれり」と自ら信ずる」と訳したが，文意を勘案して「これを以て自らを清浄なりと信ずる」に訂正する。なお，チベット訳には「これを以て」（iha）に当たる訳語はない。

[285]『中巻』には dugdha を「乳酪」と誤訳したので，「牛乳」に訂正する。

[286]garḍula(= gardula; gardūla) は通常「革紐：縄紐」の意であるが，文脈を念頭に「黍稷」と訳す。おそらく「縄紐の材料となるような或る種の森の植物」を指すと思われる（cf. BHSD,gardula）。なお，「稗穀」「蔬菜」「黍稷」については，第20巻第3号所載の拙訳（註180）を参照されたい。

[287]『中巻』には「褐衣・獣皮」と訳したが，原文に即して「獣皮・褐衣」とする。ただし，チベット訳では「褐衣・獣皮」の順になっている。なお，「褐衣」については，上註160参照。

19. 手を上に揚げ続け，髪を上に立て，また，辮髪を上に立てて，
悪道に住し，正道より退堕しながら，安楽［なる境地］に赴くことを欲する。

220 20. 草・棒・灰の上に横臥し，また，棘の上に横臥して，じっとうずくまり，
ある者は一本足で立ち，顔を上に向けて，月・太陽を眺める。

21. 泉・池・沼，《また[288]》海や池に，あるいは，太陽や月に，
樹木・山・山岳の頂上[289]に，［また］陶器・大地［など］に帰命する。

22. かの愚者たちは，種々なる危害［を加えること］を以て，身体を清浄ならしめんとする。
［彼らは］邪見に捕えられて，速やかに悪趣[290]に転落する。

23. さればいざ，われは，禁戒と苦行との，恐るべき難行を開始せん。
すなわち，諸々の天神や人間たちの行ずる能わざる難行を。

24. 金剛の如く堅固に止住[291]する，呼吸停止の禅定[292]を［われは］修定せん。
すなわち，独覚仏ですらも，示現せしめうることなき禅定を。

25. この世には，粗暴なる戒行を喜ぶ，外道の天神や人間たちが存在する。
彼らを教化するために，［われは］厳酷なる戒行[293]を始むべし。

26. ［菩薩は］何も敷かれざる地面に，結跏趺坐して坐せり。
［一粒の[294]］棗・胡麻・米による，食事の作法を示したり。

27. 入息を停止し出息を停止して，なお，力ある者（菩薩）は動揺せざりき。
六年の間，最勝なる呼吸停止[295]［の禅定］を修定せり。

28. 妄念なく，妄想なく，動揺することなく，心に迷いなく，
空界に遍満する［が如き］，呼吸停止の禅定[296]を修定せり。

222 29. 彼（菩薩）は，日向から蔭にも，蔭から日向にも行くことなかりき。
メール山[297]の如く不動にして[298]，呼吸停止の禅定[299]を修定せり。

30. また，風・雨に対して蔽いをなさず，虻・蚊・蛇蝎類に対して防護をなさず，
騒擾（騒ぎ乱れること）なき行によって，呼吸停止の禅定[300]を修定せり。

31. 彼（菩薩）は決して自分だけの利益のために呼吸停止の禅定[301]を修定せるにあらず。
他者への慈悲心を以て，世間の大利益のために修習せり。

---

[288]「また」（ca）は全写本に欠けているが，韻律上，必要である。
[289]チベット訳には「山」（giri）に当たる訳語はなく，単に「山の頂上」（riḥi rtse mo）と訳されている。
[290]「悪趣（悪道）」とは「悪業の報いとして受ける生存状態」であり，「地獄・餓鬼・畜生」を三悪趣（三悪道）という。
[291]「止住」とは「とどまり安住すること」である（『佛教語大辞典』507頁参照）。
[292]チベット訳には「虚空遍満の禅定」と訳されている。上註190参照。
[293]原文としては vrata-tapa（戒行と苦行）とする写本が多く，諸刊本もそのように校訂している。文脈上も「苦行」（tapa）を挿入すべきかと思われるが，チベット訳にはこれに当たる訳語はないので，ここでは「苦行」を削除する。
[294]チベット訳には「一粒の」に当たる訳語（gcig）がある。
[295]チベット訳には「虚空遍満」と訳されている。なお，『中巻』には「最勝なる禅定，呼吸停止」と訳したが，「最勝なる呼吸停止」に訂正する。
[296]チベット訳には「虚空遍満の禅定」と訳されている。
[297]「メール山」（meru）とは，通常「須弥山」（sumeru）の異称である。
[298]チベット訳は「不動なる［虚空遍満の禅定を］」という意味の訳文になっている。
[299]上註296と同じ。
[300]同上。
[301]同上。

32. 村の少年たち，また，牧牛者たち，材木を運ぶ者・草を運ぶ者たちは，
彼（菩薩）を塵塊のピシャーチャ（食肉鬼）と考えて，〔彼に[302]〕土を擦（なす）りつけたり。
33. 彼（菩薩）に汚物を撒布し，また，彼らは種々なる危害を加えたれども，
［菩薩は］動揺することなく，また動転することなく，呼吸停止の禅定[303]を修定せり。
34. ［身を］曲げることなく，屈（かが）めることなく[304]，身体の防護のために撫（な）でることなく[305]，
全く大小便をすることなく，音に驚くことなく，他者を見ることなかりき。
35. ［菩薩の］肉と血は乾燥して，皮・静脈・骨［のみ］が残され，
また背骨は，腹部を通して，綴られた珠数（じゅず）の如くに見えたり。[306]
36. ［かつて］すぐれた供養をなせる，かの[307]，天神・阿修羅・竜・夜叉・乾闥婆（ガンダルヴァ）たちは，
功徳を有する者（菩薩）を現前にして，彼らは[308]日夜に供養をなせり。
224 37. また，彼らは誓願を立てたり。「われらも速やかに，この人の如くにならん。
虚空の如き心を有し，呼吸停止の禅定[309]を修定せる彼の如くに。
38. 自らの利益の為（ため）のみにあらず，禅定の楽を味わう為にあらず，安楽心（あんらくしん）[310]によるにあらず，
ただ悲愍（ひみん）の心によるのみにして，世間に大利益をなす［者となる］べし」［と］。
39. 異学異論（いがくいろん）は摧伏（さいぶく）せられ，知性を喪失せる諸外道は制圧せられたり。
カーシュヤパ[311]によって言葉で説かれたる［菩提の］，業と所作とが示されたり。
40. ［すなわち］「剃髪者（比丘）にとって菩提とは何か。この世において[312]，
菩提は，多劫の間，極めて得難し[313]」と［カーシュヤパによって説かれたる菩提］の。[314]
［菩薩は］諸々の衆生を満足せしめるために，呼吸停止の禅定[315]を修定せり。
41. 総計十二那由多（ナユタ）に達する天神や人間たちが，三乗に教化（きょうけ）せられたり。
これによるが故に，善意ある者（菩薩）は，呼吸停止の禅定[316]を修定せり。

［以上］「苦行品」と名づける第17章なり。

---

[302] 東大主要写本には「彼に」（taṃ）が挿入されており，チベット訳にもこれに当たる訳語（de la）があるが，韻律上，削除すべきである。
[303] 上註296と同じ。
[304]「曲げることなく，屈めることなく」の部分のチベット訳は「高ぶることなく，卑下することもなく」という意味の訳文になっている。
[305] この部分のチベット訳は「身体を防護することなく撫でることなく」という意味の訳文になっている。
[306] この一行のチベット訳は「背骨を見れば透けて，綴られた珠数の如くなりき」という意味の訳文になっている。
[307] チベット訳には「かの」（te）に当たる訳語はない。
[308] チベット訳には「彼らは」（te）に当たる訳語はない。
[309] 上註296と同じ。
[310] ここでの「安楽心」（sukha-buddhi）とは「安楽を目的とする心」の意と見るべきであろう。
[311] kāśyapa（迦葉仏）は「過去七仏の第六番目の仏陀」であり，釈尊（第七の過去仏）の直前に出現したとされる。
[312] チベット訳には「この世において」（iha）に当たる訳語はない。
[313]『中巻』には su-durlabhā を「得られ難し」と訳したが，「極めて得難し」に訂正する。
[314] チベット訳においては，第39偈二行目からここまでの部分が「剃髪者よ，菩提はいずこにありや。菩提は，多劫の間，得難し」と，カーシュヤパによって言葉で説かれたる，業と所作とが示されたり」という意味の訳文になっている。ただし，この部分は文脈上唐突であり，後代に挿入されたものと思われる。
[315] 上註296と同じ。
[316] 同上。

第18章（ナイランジャナー［河］品[317]）

226　比丘らよ，マーラ（悪魔）波旬[318]は，菩薩が六年間苦行を為せる間，背後に常に随従せり。［菩薩の］隙をうかがい，［誘惑の］機会を狙えども，一度も，いかなる隙をも見出し得ざりき。彼（悪魔）は隙を見出し得ずして落胆し，悔恨に満ちつつ去り行けり。

そこで，かくの如く言われる。

1．林は心地よく，森の灌木は音もなき，ウルヴィルヴァー[319]の東方，
　ナイランジャナー[320]河のあるところ，

2．そこにおいて断惑行[321]に専心し，常に堅固なる勇猛ありて，
　瑜伽安穏[322]（精神の完全なる平安）を得るために，精進して勤修せる時に[323]，

3．ナムチ[324]（悪魔）は，甘美なる[325]言葉を語りつつ，近づけり。
　【「シャーキヤの息子[326]よ，立て。身体を苦しめて，汝，如何とする。[327]】

4．いざ，生きよ，生命を愛すべきなり。生存してこそ法を修習しうる。
　生きて為すべきこと，それらを為してこそ，悲しむことなし。

5．汝は痩せ，青ざめ，衰弱せり。汝の死は近づけり。
　千の比率において死があり，生はわずかに一の比率なり。

6．常に布施をほどこし，またアグニホートラ[328]（火供祭）で供物を焼けば，
　大福徳を生ずべし。［しかるに汝は］断惑行を以て何をか為さんとするや。

228　7．断惑行の道は苦に満ちて，心の制御は為し難し」［と］。
　かくの如き言葉を，その時，マーラ（悪魔）は［かの[329]］菩薩に語りたり。

8．かくの如く語りたる，かのマーラに，菩薩はその時[330]答えたり。
　「邪悪なる者，放逸の親族なる者よ。汝は自らの利益のために［ここに］来たれり。

9．マーラよ，われに，福徳による利益は，微塵も存在せず。
　されば，福徳による利益を求める者に，そのように語るがよい。

10．生は死によって終わるが故に[331]，われは［その生を］不死なりと思うことなし。
　［われは］梵行の究竟に達して，退転せざるものとなるべし。

---

[317]方広には「往尼連河品」と訳されている。
[318]「波旬」（pāpīyas）は「邪悪なる者」の意。一般に「魔王波旬」と称せられる。
[319]uruvilvā(= urubilvā)はパーリ語ではuruvelā(ウルヴェーラー）と呼ばれる。釈尊が苦行を行なった林がある村の名である。
[320]nairañjanā（尼連禅河）については，上註79参照。
[321]「断惑行」（prahāṇa）とは「正しく煩悩を断ずる修行」であり，「正断」とも訳される。
[322]「瑜伽安穏」（yogakṣema）は，チベット訳には「成就と平安」（grub daṅ bde ba）と訳されている。
[323]チベット訳は「精進して勤修せる彼に」という訳文になっている。
[324]namuci はマーラ（悪魔）の別称である。
[325]「甘美なる」（madhura）はチベット訳には「甘美にして美妙なる」（ḥjam shiṅ sñan pa）と訳されている。
[326]「シャーキヤの息子」とは「釈迦族の王子」の意である。
[327]【　】内の一行は写本 T1,T3に欠けており，チベット訳にも相当訳文がないが，この一行を削除すると1行不足となるために，第2偈が三行から成る偈となる。文脈上，第3偈の中に含めるのが妥当である。
[328]agnihotra とは，通常「朝夕に，火神アグニに牛乳を供える儀式」である。
[329]チベット訳には「かの」に当たる訳語（de）がある。
[330]「その時」（tato）は，チベット訳には「かくの如く」（ḥdi skad）と訳されており，梵文と合わない。
[331]チベット訳は「生の終わりには死があるが故に」という意味の訳文になっている。

11. 風は，諸々の河の流水をも，実に，枯渇せしむべし。
　　まして，自ら勤修せる者の血を，それ（風）は何すれぞ枯渇せしめざらんや。
12[332]. されど，血が枯渇して，その後に，まさに肉が枯渇し，
　　肉が干からびる時に，心は，なおいっそう，清浄となり，
　　さらになお，意楽と精進と三昧とは存続する。
13. まさに，かくの如くわれは住しつつ，最高の感受（知覚）を得たれば，
　　心は身体を[333]顧慮することなし。［わが］自制心の清浄なるを見よ。
14. われには意楽（念願）があり，また，精進と智慧とが存在せり。
　　われの精進を動揺せしめうるような者を，われは世間に見出さず。
15. 生命を奪う死はむしろ優れたり。あわれにも，俗悪なる生は然らず。
　　敗北して生きるよりも，戦闘における死が，より好ましい。[334]
230 16. 臆病なる者は軍勢に勝利せず。されど，勇猛なる者は軍勢に勝利し，
　　勝利してもそれを誇ることなし。マーラよ，［われは］速やかに汝に勝利せん。
17. 〈愛欲〉が汝の第一の軍勢にして，また，〈不快〉が第二なり。
　　汝の第三は〈飢渇〉にして，〈渇愛〉が第四の軍勢なり。
18. 〈惛沈睡眠[335]〉が汝の第五にして，〈恐怖〉が第六と言われたり。
　　汝の第七は〈疑惑〉にして，また，〈忿怒〉と〈偽善[336]〉とが第八なり。
19. 〈利得〉と〈名声〉，また〈厚遇〉，さらに〈不正に名誉を得ること〉，
　　〈自らを称賛すること〉，また〈他者を誹謗すること〉，
20. これらが，苦悶を与える[337]，黒闇の親族ナムチ（悪魔）の軍勢なり。
　　或る沙門・婆羅門たちは，これらに侵されたりと見られる。
21. 汝の軍勢は天界を含むこの世間を制圧すれども，汝の[338]その軍勢を，［われは］
　　智慧によって，焼かれざる土器を水によって破るが如く，打ち破るべし。
22. ［われは］正念を確立し，また，智慧を余すところなく修習して，
　　正知をもって修行せん。悪意ある者よ，汝は何をか為さんとするや。」

かくの如く言われて，マーラ（悪魔）波旬は苦悩し，落胆し，憂愁し，悔恨に満ちて，まさに，そこにおいて隠没[339]せり。

さてその時，比丘らよ，菩薩は，かくの如く思念せり。「過去・未来・現在の世における，或る沙門や婆羅門たちは，自らを傷つけ，身体を痛めつけ，苦しく，烈しく，辛く，苛酷にして，不快

---

[332] 第３偈に１行を挿入したために，１行の余分が発生しているので，文脈を勘案して，この偈（第12偈）を３行から成るものとする。

[333]「心は身体を」に当たるチベット訳は「身体と生命とを」という意味の訳文になっている。

[334] この一行のチベット訳は「戦闘における死は，より好ましく，敗北して生きるは然らず」という意味の訳文になっている。

[335]「惛沈」（styāna）は「心が暗く沈みこみ，ふさぎこむこと」，「睡眠」（middha）は「意識がぼんやりして刺激反応が起こらないこと」である。

[336]「偽善」の原語 mrakṣa は「覆」「所覆」などと訳されるように，「自己の過ちを隠蔽すること」をいう。

[337]「苦悶を与える」に当たる部分のチベット訳は「堕落せる」という意味の訳文になっている。

[338] チベット訳には「汝の」に当たる訳語がなく，代わりに「彼らを（打ち破るべし）」に当たる訳語（de dag）がある。

[339]「隠没」とは「姿が隠れ，見えなくなること」である。

232 なる感覚を感受する。彼らは，かくの如き類の[340]，この上なき苦痛を受ける」[と]。

比丘らよ，その時われは，かくの如く思念せり。「この，わが[341]修行によっても，この行法によっても，人間（世俗）の法を超えたところの，真に高貴なる知見の殊勝なる境地が證得せられることは，よもあるまじ。これは菩提の道にあらず。この道は将来の生・老・死《の発生[342]》を断滅するものにあらず。《これより別に，将来の生・老・死の苦の発生を断滅する，菩提の道があるべし》[と]。[343]》

比丘らよ，その時われは，かくの如く思念せり。「われが，[かつて] 父の園林（おんりん）において，ジャンブ樹の蔭（かげ）に坐して，諸々の愛欲を離れ，悪・不善の法を離れ，有尋（うじん）（有覚（うかく））・有伺（うし）（有観（うかん））[344] にして，遠離（き）より生じたる喜（き）・楽（らく）を有する第一の禅定（初禅（しょぜん））に達して安住し，乃至（ないし），第四の禅定[345]にまで達して安住したるところの，あれが，生・老・死の苦の集起（しゅうき）（集合的発生）を断滅する菩提の道なるべし」と。それに随順して，われに認識（確信）が生じたり，「あれが菩提の道なり」と。

その時われは，かくの如く思念せり。「この道は，かくの如く衰弱せる状態にありては，等正覚（とうしょうがく）[346]を現証するに至ること能（あた）わず。もしわれが，かくの如く粗悪にして虚弱なる身体そのままに，神通[347]と智との力によって菩提道場に赴くならば，われは後世（こうせい）の人々に悲愍（ひみん）をほどこさざることになるべし。これもまた菩提の道にあらず。されば，われは有形の食物[348]（美食（みじき））を食して，
234 身体の精力を生ぜしめたるのち，初めて菩提道場に赴くべし」[と]。

その時，比丘らよ，劣悪なるものを信じ求める天子たちがありて，彼らは，われの心の思案を心で察知して，われのところに近づきて，われにかくの如く言えり。「善士（ぜんし）（立派な人）よ，あなたは有形の食物を受けたまうことなかれ。われらは，あなたの毛孔（もうこう）より，精気を注入せん」[と]。

比丘らよ，その時われは，かくの如く思念せり。「われは『断食せん』と自ら宣言したり。また，《われの[349]》托鉢（たくはつ）する村（托鉢村）に住する，近隣の人々も，かくの如く『沙門ガウタマは断食せり』と認知したり。しかるに，かくの如く，これらの，劣悪なるものを信じ求める天子たちが，われの毛孔より精気を注入するならば，それは[350]われにとって最大の妄語（虚言）たるべし」[と]。かくして，菩薩は，妄語を避けるために，かの天子たち［の申し出］を拒絶して[351]，有形の食物に心を向けたり。

---

[340] チベット訳には「かくの如き類の」（etāvat）に当たる訳語がない。

[341] チベット訳には「わが」（mayā）に当たる訳語がない。

[342]《　》内の部分の原語（saṃbhavānām）は東大主要写本に欠けているが，チベット訳によれば挿入すべきである。直後の記述によれば「生・老・死の苦の発生」の意である。

[343]《　》内の部分の原文は東大主要写本には欠けているが，チベット訳によれば挿入すべきである。

[344] 尋（覚）とは「粗大な思惟活動」（表象作用）であり，伺（観）とは「微細に分別する深い考察」（識別作用）である。したがって，「有尋（有覚）」とは「心に表象作用があること」であり，「有伺（有観）」とは「心に識別作用があること」である。

[345]「四禅定」については，第20巻第1号所載の拙訳（註158）を参照されたい。

[346]「等正覚」は「正等覚」ともいう。「一切平等の理を正しく覚ること」「最高至上の仏の境地」である。

[347]「神通」（abhijñā）とは「凡人の能力を超えた，不可思議で自在な能力」である。

[348]『中巻』には「固形の食物」と訳したが，「有形の食物」に訂正する。方広には「今應受美食（今應に美食を受けて）」と訳されている。「美食」とは「酥・生酥・油・蜜・砂糖・魚・肉・乳・凝乳」をいう（『佛教語大辞典』1293頁参照）。

[349]「われの」（me）は東大主要写本に欠けているが，チベット訳によれば挿入すべきである。

[350] チベット訳には「それは」（sa）に当たる訳語がない。

[351] チベット訳は「かの天子たちの言葉を聞くことなく」という意味の訳文になっている。

かくして実に，比丘らよ，六年間の禁戒[352]と苦行を成し遂げて，菩薩は，その座より起ち上がり，「有形の食物を食すべし」との言葉を発したり。「例えば，甘蔗汁・ムンガ[353]の煮汁・ハレーヌカ[354]の煮汁・米飯・粥・混合粥を［食すべし］」と。

さてその時，比丘らよ，五群賢者[355]に，かくの如き思念が生じたり。「かくの如き，この修行[356]によってすら，かくの如き，この行法によってすら，沙門ガウタマは，人間（世俗）の法を[357]超越せる，真に高貴なる知見の殊勝なる境地を，いささかも證得すること能わざりき。況や，今[358]，有形の食物を食して，世俗の安楽の享受に専心して住すれば尚のことなり。この者は愚昧なる小人な
236 り」と考えて，菩薩の傍から去り行けり。彼らはヴァーラーナシー（ベナレス）に行き，リシパタナ（仙人墮處）のムルガダーヴァ（鹿野苑）に住したり。

その時，苦行を勤修せる菩薩には，最初から，村長の娘十名が［菩薩を］見るために，礼拝するために，また，親しく仕えるために近侍したり。かの五群賢者もまた［菩薩に］仕え，一粒の棗・胡麻・米の施物は［彼らから］献上せられたり。［十名の娘とは[359]］バラーと名づける娘と，バラグプターと，〔プリヤーと[360]〕スプリヤーと，ヴィジャヤセーナーと，アティムティカマラーと，スンダリーと，クンバカーリーと，ウルヴィッリカーと，ジャティリカーと，及びスジャーター[361]と名づける村長の娘にして，これらの娘たちは，菩薩のために，色々な種類の粥汁の，それらの全てを作って献上したり。

また，菩薩はそれらを食したる後，次第に，托鉢村を乞食してまわるようになり，顔色よく，容色すぐれ，活力ある者に成れり。それ以来，菩薩は「スンダラ（端正なる）沙門，大沙門」と呼ばれたり。

比丘らよ，その時，スジャーター（善生）なる村長の娘は，菩薩が苦行を勤修せるとき，最初から，菩薩の禁戒と苦行が成就する［ことを祈願する］ために，また，［菩薩の］身体の養生のために，毎日，八百名の婆羅門に食べ物を供養せり。また，かくの如き誓願を発したり。「わたしの食べ物を食して，菩薩が無上正等覚を證得したまわんことを」と。

比丘らよ，六年を経過して，その時われの袈裟衣は朽ち弊れたり[362]。《比丘らよ[363]》その時われは，かくの如く思念せり。「もしわれが，［一枚の[364]］腰布[365]を得るならば，甚だ宜しかるべし」［と］。

---

[352]「禁戒」とは「禁じられた戒めを守ること」である。

[353]「ムンガ」（muṅga）は「隠元豆の一種」である。

[354]「ハレーヌカ」（hareṇuka）も「豆の一種」である。

[355]「五群賢者」は「常に釈尊に随従してきた五名の修行者」であり，後に釈尊の最初の弟子（五比丘）となる。

[356]「修行」（caryā）は，チベット訳には「道」（lam）と訳されている。

[357]『中巻』には「人間（世俗）の最上なる法を」と訳したが，「最上なる」を削除する。

[358]「今」（etarhi）は，チベット訳には「この」（ḥdi）と訳されている。

[359]チベット訳には「村長の娘十名とは」（groṅ paḥi bu mo bcu ni）が挿入されている。

[360]多くの写本が「プリヤーと」（priyā ca）を挿入しているが，チベット訳にはこれに当たる訳語がなく，また，これを入れると十一名になるので，削除すべきである。

[361]以上十名の娘の原語は順次 balā, balaguptā, supriyā, vijayasenā, atimuktakamalā, sundarī, kumbhakālī, uruvillikā, jaṭilikā, sujātā である。このうち atimuktakamalā は，チベット訳［a ti muk ta kaḥi phreṅ ba］によれば atimuktakamālā と読むべきであるが，写本の支持が充分でない。

[362]チベット訳には「その時われの袈裟衣は朽ち弊れたり」に当たる訳文が欠落している。訳者の不注意によるものか？

[363]東大主要写本には「比丘らよ」（bhikṣavaḥ）が欠けているが，チベット訳によれば挿入すべきである。

[364]チベット訳には「一枚の」に当たる訳語（ḥgaḥ shig）がある。

[365]「腰布」の原文 kopīnapracchādana とは「陰部を覆うもの」の意である。

238　実にまた，比丘らよ，その時，村長の娘スジャーターの下女にして，ラーダー[366]と名づける者が命終せり。彼女は麻の衣に包まれて，墓地に運ばれ[367]捨てられたり。われは，その糞掃衣[368]を見つけたり。そこでわれは，その糞掃衣を左足で踏みつけ，右手を伸ばして，それを取るために身をかがめたり[369]。

その時，大地の神々は中空の神々に，声を出して告げたり。「友らよ，希有なり。友らよ，これは奇特なり。そもそも，かくの如く，偉大なる王の家系に生まれながら，転輪聖王の位を捨てて，糞掃衣に心を向けるとは」と。中空の神々は大地の神々の声を聞いて，四大王天の神々に声を発して伝えたり。四大王天衆は三十三天［衆］に，三十三天（忉利天）は夜摩天に，夜摩天は兜率天に，兜率天は化楽天に，化楽天は他化自在天に，《他化自在天から[370]》，乃至，梵衆天に至るまで，かくの如く，実に，その刹那，その瞬間，その須臾の間に，色究竟天に至るまで，ひとつの声，ひとつの叫びが響きわたれり。「友らよ，これは希有なり。友らよ，これは奇特なり。そもそも，かくの如く，偉大なる王の家系に生まれながら，転輪聖王の位を捨てて，糞掃衣に心を向けるとは」と。

その時また，菩薩はかくの如く思念せり。「われは糞掃衣を得たり。もし水を得たらば，甚だ宜しかるべし」と。すると即座に，［或る］神が手で地面を撃てり。そこに池が出現したり。今日でも，
240　その池［の名］は「パーニハター」（手で撃たれた）として知られたり。

さらにまた，菩薩はかくの如く思念せり。「われは水を得たり。もし，この糞掃衣を洗うための平石を得たらば，甚だ宜しかるべし」［と］。その刹那に，帝釈（インドラ天）は，まさにその場所に，平石を安置したり。それ［の上］で，菩薩は，かの糞掃衣を洗濯したり。

その時，天主帝釈は菩薩にかくの如く言えり。「善士よ，これをわれに渡されよ。われが洗わん」と。しかるに菩薩は，出家者は自ら［自分の］所用を済ませるべきことを示すために，その糞掃衣を[371]帝釈に渡さず，自分自身で洗濯したまえり。彼（菩薩）は疲れ[372]，疲弊せる身体を以て池に降りたのち，上がらんとせり。【しかし[373]】マーラ（悪魔）波旬は，嫉妬の情に捕えられて，池の岸を高峻なるものに変化せしめたり。その池の岸辺にカクバ[374]の大樹あり。そこにおいて[375]，菩薩は，世間に随順するために，また，［樹］神に利益を与えるために，樹神に告げたり。「樹神よ，樹の枝を差し出せ」と。かの女神（樹神）は樹の枝を垂れ下げたり。菩薩はそれを掴んで上がりたり。上がりたるのち，また，そのカクバ樹の下にて，【かの[376]】糞掃衣を僧伽胝衣[377]（大衣）と作して，縫

---

[366]「ラーダー」の原語は rādhā である。

[367]チベット訳には「運ばれ」（apakṛṣya）に当たる訳語がない。

[368]「糞掃衣」とは「塵芥の中に捨てられてあるぼろきれ」であり，「そのぼろきれを綴り合わせて作った衣」である。ここでは，「死体を包んであった衣」を指している。

[369]チベット訳は「その糞掃衣を取るために，左足で踏みつけ，身をかがめて，右手を伸ばしたり」という意味の訳文になっている。

[370]東大主要写本には「他化自在天から」（paranirmitavaśavartino）が欠けているが，チベット訳によれば挿入すべきである。

[371]チベット訳には「その糞掃衣を」（tat pāṃśukūlaṃ）に当たる訳文がない。

[372]チベット訳には「疲れ」（śrāntaḥ）に当たる訳語がない。

[373]「しかし」（ca）は東大主要写本に欠けており，チベット訳にもそれに当たる訳語はない。

[374]kakubha は「樹木の一種」であるが，方広には「阿斯那」と訳されており，梵文と合わない。また，チベット訳［sgrub byed(= arjaka?)］も梵文に合わないように思われる。

[375]チベット訳には「そこにおいて」（tatra）に当たる訳語がない。

[376]「かの」（tat）は，T3以外の写本に挿入されているが，チベット訳にはこれに当たる訳語はないから，削除すべきと思われる。

[377]「僧伽胝」（saṃghāṭi）は「僧の三衣の中の最大のもの」であり，説法や托鉢に際して必ず身に着けるべきものとされる。

い合わせたり。今日でも，それは「縫合糞掃衣」と［いう名で］，斯く知られたり。

その時，ヴィマラプラバ[378]（無垢光）と名づける，浄居天に属する天子あり，彼は，天上の衣服にして袈裟の色に染められた，適当にして沙門にふさわしきもの数枚を，菩薩に献上したり。また，
242 菩薩はそれらを受納して，晨朝時[379]に，内衣（肌着）を著け，僧伽胝衣（大衣）を着て[380]，托鉢村に向かいたり。

その時に神々は，ウルヴィルヴァーのセーナパティ村の，ナンディカという村長[381]の娘スジャーターに，真夜中時に告げたり。「そのために，汝があれほど，かの供犠祭式を捧げたるところの，その禁戒を成就して，彼（菩薩）は滋味ある有形の食物を食したまうべし。しかも，汝はかつて誓願を発したり。『わたしの食べ物を食して，菩薩が無上正等覚を證得したまわんことを』と。あの，汝の為すべきこと，それを為すがよい」と。

さてその時，比丘らよ，村長ナンディカの娘スジャーターは，かの神々から，その言葉を聞くや，ただちに，千頭の牛の乳を七回精製して，最高の滋味ある醍醐（最も醇正なる乳酪）を得たり。また［それを］得て，彼女は[382]その乳酪を，きわめて新鮮なる米とともに，新しい鍋に入れ，新しい竈に据えて，その食物を用意したり。また，それを用意している時に，次の如き前兆が見られたり。すなわち，その乳酪の上に[383]，シュリーヴァトゥサ・スヴァスティカ・ナンディアーヴァルタ・パドゥマ・ヴァルダマーナ[384]等の，諸々の吉兆相が現れたり。その時，彼女は，かくの如く思念せり。「かくの如き，これらの兆しが現れたるが故に，必ずや，食物を食したるのち，菩薩は無上正等覚を證得したまうべし」［と］。また，手相占いの知識と儀法に通じたる占相師が，その地方に到来せり。彼もまた，全く同様に，まさしく甘露（悟り）の獲得を予言したり。それから，スジャーターは，その乳糜（乳粥）を煮終えて，［鍋を］地面に置き，花を散じて，香水を灌ぎ，丁重に座を設
244 えて，ウッタラー[385]と名づける侍女に告げたり。「ウッタラーよ，行って，婆羅門を招待せよ。わたしは，この美味なる乳糜を監視せん」［と］。「承知しました，ご主人さま」と答えて，［ウッタラーは］東の方向に行けり。彼女はそこに[386]菩薩を見たり。同様にまた，南方にも菩薩を見たり。同様に，西と北との，各方向に行くや，それぞれ，そこに菩薩を見たり。実にまた，その時，浄居天に属する天子たちによって，一切の外道衆が摧伏せられたるが故に，［外道衆の］誰も［その姿］が見えなくなれり。そこで，彼女（ウッタラー）は戻り来たりて，主人（スジャーター）にかくの如く告げたり。「実に御主人さま[387]，他の沙門や婆羅門は誰も見えません。ただ，わたしがどの方向に行っても，それぞれ，そこにスンダラ（端正）沙門だけが見えます」［と］。スジャーターは言えり。

---

[378] vimalaprabha は「無垢なる光」の意であり，方広にも「無垢光」と訳されている。なお，『中巻』に，方広には「離垢光」と訳されていると注記したが，これは不注意による誤りである。

[379]「晨朝時」については上註31を参照されたい。

[380] チベット訳は「内衣と僧伽胝衣を身に着けて」という意味の訳文になっている。

[381]「村長」（grāmika）は，チベット訳には「ある村民」（groṅ mi shig）と訳されている。以下，「村長の娘スジャーター」という表現については，全て同じである。grāmika は元来「村民」の意であるが，『梵和大辞典』には「村長」と訳されており，二つの意味の間での揺らぎが見られる。cf. BHSD.grāmika.

[382] チベット訳には「彼女は」（sā）に当たる訳語がない。

[383] チベット訳は「乳酪の中に」という意味の訳文になっている。

[384] śrīvatsa, svastika, nandyāvarta, padma, vardhamāna は，いずれも瑞相である。方広には「千輻輪波頭摩等吉祥之相」と訳されている。

[385] uttarā は，方広には「優多羅女」と音訳されている。

[386] チベット訳には「そこに」（tatra）に当たる訳語がない。

[387] チベット訳には「実に御主人さま」（khalv ārye）に当たる訳文がない。

「ウッタラーよ，［再度］行きなさい。彼こそ婆羅門にして，彼こそ沙門なり[388]。まさに彼のために，これは用意せられたり。彼だけを招待しなさい」[と]。「承知しました，ご主人さま」と，ウッタラーは行って，菩薩の両足の前に平伏して，スジャーターの名によって招待せり[389]。かくして比丘らよ，菩薩は，村長の娘スジャーターの住處に赴き，設けられたる座に坐したり。

さらにまた，比丘らよ，村長の娘スジャーターは，金製の鉢を美味なる乳糜で満たして，菩薩に献上したり。

その時，菩薩に，かくの如き思念が生じたり。「スジャーターによって，この食物が献上せられ，
246 われが，今，この〔食物を[390]〕食すれば，必ずや無上正等覚を證得すべし」[と]。

それから菩薩は，その食物を受けて，村長の娘スジャーターに，かくの如く言えり。「淑女よ，この金製の鉢は，如何になすべきや」[と]。彼女は答えたり。「御身のものとなしたまえ」と。菩薩は言えり。「かくの如き［贅沢な］容器（鉢）は，われには無用なり」[と]。スジャーターは言えり。「欲するままに処したまえ。わたしは誰に対しても，容器（鉢）を別にして食物だけを施与することはございません」[と]。

そこで菩薩は，その施物（食物を入れた鉢）を持ち，ウルヴィルヴァーから去りて，《午前中の[391]》［食事を摂るべき］時間帯に，龍の河なるナイランジャナー河に[392]赴き，その施物と上衣（大衣）とを一箇処に置いて，身体を清めるためにナイランジャナー河に降りたり[393]。

実にまた，比丘らよ，菩薩が沐浴せる時に，数百千もの天子たちが，天界のアガル[394]（沈水香）・栴檀の香末や塗香を河に混入せり。また，天界の様々な色の花を水中に撒布したり。言うまでもなく，菩薩を供養せんがために。

それ故また，その時，ナイランジャナー河は天界の香や花に満ちて流れたり。そして，その香水を以て菩薩が沐浴するや，《それを[395]》百千拘胝尼由多もの［多数の］天子たちが汲み上げて，それぞれ自分の宮殿に持ち帰りたり。塔廟（チャイティヤ）を建てて供養するために。

また，菩薩の髪と鬚たりしところのもの，それらも，村長の娘スジャーターが「吉祥なり」と考
248 えて，塔廟を建てて供養するために持ち帰りたり。

また，菩薩は河より上がり，坐らんと欲して中州を見たり。その時，ナイランジャナー河に竜女あり，彼女は地中より涌出[396]して，意より成る[397]玉座を菩薩に献上したり。菩薩はそこに坐して，村長の娘スジャーターを哀愍するが故に，その美味なる乳糜（乳粥）を，必要とするだけ（充分に）

---

[388] チベット訳には「彼こそ沙門なり」（sa eva śramaṇaḥ）に当たる訳文がない。

[389] チベット訳は「スジャーターの名によって『招待します』と言えり」という意味の訳文になっている。

[390] 東大主要写本には「食物を」（bhojanaṃ）が挿入されているが，チベット訳にはこれに当たる訳語はない。文脈上も不要につき削除して，「これを食すれば」と訳すべきか？

[391] 東大主要写本には「午前中の」（pūrvāhna）が欠けているが，チベット訳を参考に挿入すべきである。なお，『中巻』には「日中の」と訳したが「午前中の」に訂正する。

[392] チベット訳は「ナイランジャナー河の堤に」という意味の訳文になっている。「ナイランジャナー河」については，上註79を参照されたい。

[393] チベット訳は「河の中に入りたり」という意味の訳文になっている。

[394] 「沈水香」の原語は多くの写本においてaguruとされるが，ここではチベット訳［a ga ru］を参考に，写本T3に従ってagaruと読む。

[395] 東大主要写本には「それを」（taṃ）が欠けているが，チベット訳によれば挿入すべきである。

[396] 「涌出」とは「［地中から］現れ出ること」である。

[397] 「意より成る」（manomaya）とは，「意志によって生じた」「心によってつくられた」「精神的な（物質的でない）」の意である。

食したり。また，食したるのち，その金製の鉢を，躊躇することなく，水中に投げ捨てたり。捨てられたるや否や，それを[398]サーガラ[399]竜王は，「供養の価値あり」と考えて，尊崇と恭敬の念を生じて受け取り，自らの宮殿に向かって出立せり。その時，城邑の破壊者たる千眼者（インドラ天）はガルダ鳥（金翅鳥）の姿に変化し，金剛の嘴を化作して[400]，サーガラ竜王より，かの金製の鉢を強奪せんと試みたるも，果たし能わざりしかば，その時，自分［本来］の姿に戻り，礼を尽くして懇願し［譲り受け］て，塔廟を建てて供養するために，三十三天（忉利天）の宮殿に持ち帰りたり[401]。持ち帰りて，また，「鉢の祝祭」と名づける節会[402]を催したり。今日でも，三十三天の天界では，毎年一回，鉢祭が催される。また，かの玉座も，かの竜女自身が，塔廟を建てて供養するために持ち帰りたり。

また，比丘らよ，菩薩が有形の食物を食し終えるや否や，その時，まさにその瞬間に，菩薩の福徳の力により，また，智慧の力によって，［菩薩の］身体に，かつての美しく円満なる身色が出現したり。また，三十二の大人相と，八十種の随好相と，圓光一尋相[403]もまた［出現したり］。

250 そこで，かくの如く言われる。

23. 六年間の禁戒を完遂して，賢明なる世尊は，かくの如く考えたり。
「もし，われが禅定・神通・智力を有しながら，斯く身体羸痩せるがままに，
樹王（菩提樹）の枝の[404]下に赴き，一切智（正等覚）を證得するとせよ，
斯くするとすれば，われは後代の人々に悲愍を施さざることとなるべし。

24. さればいざ，最上なる有形の食物を食して，身体の精力を回復してから，
一切智を證得するために，樹王（菩提樹）の枝の下に赴くべし。
福徳貧弱なる，これらの天・人が劣悪なる方法によって[405]智を尋求することなく，
また，彼らが身体を虚弱ならしめて甘露（不死）を證得し得ざることのなきように」と。

25. 前世に修行を積みたる，かの，スジャーターと名づける村長の娘は，
「導師が禁戒を成就せんことを」との，かくの如き願いを以て常に祭式を捧げたり。
彼女は，天神たちからの勧告を聞くや，その時，美味なる乳糜を持って，
心に歓喜し，河の堤に近づきて，ナイランジャナーの岸辺に立てり。

26. 千劫の間，勤修して，平静・寂静なる感官を有する，かの聖仙（菩薩）は，
天神や竜の群衆に囲まれて[406]，ナイランジャナー河に来たり，
［自ら］彼岸に渡りて衆生をも渡らしめる智者（菩薩）は，沐浴せんと思念して，
清浄無垢なる牟尼（菩薩）は，世間を哀愍するが故に，河に入りて沐浴せり。

---

[398] チベット訳には「それを」（tāṃ）に当たる訳語がない。
[399] sāgara は「海竜王」（海に住む竜王）である。
[400] チベット訳は「口を金剛の嘴に変えて」という意味の訳文になっている。
[401] 方広では，この部分の描写が「金鉢を奪い取り，本宮に還り，塔を起して供養せり」となっている。梵文のほうが後代の改変である可能性が高い。
[402] チベット訳は「大鉢の僧伽祭」（snod chen poḥi dge ḥdun gyi dus ston）という表現になっている。
[403]「圓光一尋相」（vyāma-prabhatā）は「三十二相の一つ」とされ，「仏菩薩の頭頂の背後から一尋の円輪の光明が発している様子」をいう。「尋（ひろ）」とは「両腕を広げた長さ」である。
[404] チベット訳には「枝の」（viṭapa）に当たる訳語がない。
[405]『中巻』には「粗暴［なる苦行］によって」と訳したが，「劣悪なる方法によって」に訂正する。
[406] チベット訳は「彼（菩薩）は，天神と竜と聖仙たちに囲まれて」という意味の訳文になっている。

252　27. 千拘胝もの［多くの］天神が，歓喜の心を以て河に降り来たり[407]，
最勝なる衆生（菩薩）の沐浴のために，諸々の香や香末を水に混入せり。
無垢なる菩薩は沐浴し，沐浴し終えて岸に上がらんとの想いを起こせり。
千もの［多くの］天神が，最勝なる衆生の沐浴水を供養のために持ち帰りたり。
28. 袈裟と，無垢清浄なる衣とを，天子が彼（菩薩）に与えたり。
［袈裟の］適当なるものと内衣とを身に着けて，世尊は河の岸に立ちたまえり。
竜の娘（竜女）は歓喜し，喜悦の心を以て，彼女は[408]玉座を設けたり。
そこに，かの，世間に眼を与える心意寂静なる者（菩薩）は坐したまえり。
29. かのスジャーターは，金製の鉢に食物を入れて，智者（菩薩）に与え，
彼女は歓喜し[409]，足下に平伏して，「調御師よ，わがために食したまえ」［と言えり］。
智者（菩薩）は，必要なだけ食物を食したるのち，鉢を河に投げ捨てたり。
天神の主なる城邑破壊者（インドラ）は「われは供養すべし」と，それを取得せり。
30. また，勝者（菩薩）が最上なる有形の食物を食したる時，その刹那において，
彼の身体の精力と，威光と美しさは，以前の如くに具われり。
スジャーターと天神たちに法を説示して，多大なる利益を与えたるのち，
獅子なる者（菩薩）は，鵞鳥の歩調と象王の歩行とを以て，菩提樹へと出立せり。

［以上］「ナイランジャナー［河］品」と名づける第18章なり。

[407] チベット訳には「河に降り来たり」（oruhyā nadi）に当たる訳文がない。
[408] チベット訳には「彼女は」（sā）に当たる訳語がない。
[409] チベット訳には「彼女は歓喜し」（sā pramuditā）に当たる訳文がない。